

Summer Pockets 小説
集

京四郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Summer Pocketsの二次小説です。

不定期で、気が向いて書けた時に更新していきます。

なお、基本どの話も攻略後の話を含むので、ネタバレ注意です。

目次

紬の結婚式	1
ヴェンダース・オリジナル	8
赤と緑の祭り	16
とある後日談くヤキモチを妬くヒロイン達く	25
星に願いをく紬の七夕く	39
誕生日の夜にく星に願いをく	53
眩しさを抱きしめてくHappy Birthday	61
最高のプレゼント	67
『檻の蝶は迷い鳥と大空を舞う夢を見る』	77
羽依里の一番長い日	88
はじめてのおつかい	104
く藍色の初恋く（お試し版）	116
伝説の始まり（お試し版）	121
VEREINGENく秘めた願望達く（お試し版）	125
彼と彼女の望むもの	129
家族 団欒	142
鴉が飛んだ日	151
家族と祝う日	166
『Summer Pockets』発売五周年記念 ショート・ストーリー	171

紬の結婚式

それはとある八月後半の夜……

わたしとハイリさんが、灯台で一緒に暮らし始めて、何日か目のことでした。

「なあ、紬……そういえば、一つ忘れてた事があるんだけどさ」

「はい、なんでしょう？」

「一生分のイベントをするだろ？だからさ……」

「むぎゆ〜？」

ハイリさんは、なんだかとても話しくそうにしています。

時々口をぱくぱくさせて話そうとするのですが、言葉が出てこないみたいです。

「ええと……これは70年分とかじゃないんだけどな？その、結婚式、とかもあるよなあって……」

「むぎゆ!?そ、そうですよ!70年も毎年結婚式をしてたら大変です!」

「そ、そうだよな、一回でいいよな？」

「もちろんです、それに毎年結婚式って誰と挙げるんですか」

「え、そりや紬と……」

「むぎゆく……それは、うれしいですけど……でも、70回もするものじゃないとおもいますよ?」

ハイリさんの言葉にもものすごく動揺してしまって、照れ隠しもあって、あわててしまいました。

目の前に居るハイリさんは、顔を真っ赤にしています。

きつとわたしも真っ赤になっちゃってます……むぎゆく……

「で……紬はどうしたい?俺はしたいと思ってるけど、こればかりは紬の気持ちもね」

「えと、ですね……結婚式はちよつと……」

「恥ずかしい?」

「それもあります、けど、でもそれ以外もあります……えと……」

「……うん、無理しなくて大丈夫だよ、紬」

「はい……」

困っているわたしを見ていたハイリさんが、苦笑いしながらわたしの頭を撫でてくれました。

それがうれしくて、でも申し訳なくて、わたしは短く返事だけして撫でられ続けます。

本当は、わたしも、ハイリさんと結婚式を挙げたいです。

でも、わたしは、夏が終わったら、かえらなければいけません。

それに、ツムギちゃんが帰ってきた時に、わたしがハイリさんと結婚してしまっていたら、ツムギちゃんにも、周りのみなさんにも、ハイリさんにも……みんなに迷惑がかかってしまいます。

ツムギちゃんは灯台守さんの事が好きでしたから、ハイリさんと一緒に居なければならなくなったら、困ってしまうと思います。

あと……もしツムギちゃんとハイリさんが、そのまま一緒に過ごしていたら……たぶん、きつと、わたしは嫉妬してしまいます。

だけど、そう言ってくれた事は、思ってくれた事は、すごくすごくうれしかったので。

「あの、ハイリさん……」

「ん？」

「ありがとうございます……だ、大好きです」

「ああ……俺もだよ」

うれしかったので、わたしは笑顔でお礼を言います。
きつと、ちよつとまだ顔は赤かったでしょうけど。

ハイリさんも笑顔で返事をしてくれました。

……

.....

わたしは、読んでいた日記を閉じます。

懐かしくて温かくて大切な……あの夏の思い出。

ずっとツムギちゃんを探して、夏を繰り返して、ハイリさんとシズク、二人も大切な人と出会って、ハイリさんと恋人になって……一緒に過ごして。

ツムギちゃんの代わりではなくて、自分のやりたいことを見つけて、いっぱいかなえて、わたしとして過ごしたあの夏。

「紬……準備できたかしら？」

「あ……はい！」

返事をする、灯台の下の方からシズクが上がってきました、青い色のドレスを着てとっても綺麗です。

「シズク、すごくきれいですー！」

「あらあら、ありがとう。でも今日の主役さんの方が、綺麗で可愛いと思うわよ？」

「あ、ありがとうございます……むぎゆ……」

そう言っただけでシズクがわたしの服装を見てすごく嬉しそうに笑います。

きれいとか可愛いって言われるのは、やっぱりちよつと、はずかしいですね……

「やっぱり、羽依里君にはもつたないわねえ。私がおらつちやおうかしら？」

「わっ……だ、だめですよー！」

シズクがものすごい勢いで抱きついてきて、思わず大きな声を上げてしまいました。そのすぐ後に、階段の下から急いで駆け上がってくる足音が聞こえます。

「おい、なにかあったの……か……え？」

上がってきたのは……ハイリさんでした。

わたしとシズクがぎゅつとしていているのを見て目を丸くしています。

「ここら、女性の部屋に入る時はノックしないとね、羽依里君？」

「……」

「……む、むぎゅー？」

「……あら？」

シズクの冗談を聞いても、目を丸くしたまま固まってしまっています。

「こ、これはどうしたんでしょうか……」

「……紬」

「むぎゅー？」

「……綺麗だ」

「むぎゆううー!?」

「あらあら、紬のドレス姿に見とれちゃったた訳ね……ふふふ」

笑顔でシズクがわたしを放してくれました。

でもむしろぎゅつとしていてくれた方が良かったです、今はハイリさんに見られるのが何故だかとても恥ずかしいです……

「そ、そういうハイリさんこそ、格好いいですよ!」

「そ……うか?」

「そうです、いつもの十倍増しくらいです! 紬も思わず見とれちゃいます!」

「あらー、本当に羽依里君の事が大好きなのねえ、紬は」

「そ、そうです! 大好きですよ!」

「あ、ありがとうな、紬」

お返しに褒めるつもりがなんだか余計にはずかしい事言ってしまった気がします……むぎゆうう……

でも、ハイリさんのタキシード姿は本当に格好よくて……どきどきします。

「さあ、二人とも。そろそろ時間よ。皆外で待ってるわ」

「そうだな……行こうか、紬?」

「はい……ハイリさん」

ハイリさんが笑顔で差し出してくれた手を、わたしも笑顔で手を伸ばして握みます。ハイリさんの手は、ハイリさんの優しさが伝わってくるようでとっても暖かいです。二人で手をつないだまま、ゆっくりと階段を下りて、灯台の入り口のドアを開けました。

「結婚おめでとう！」

皆さんの祝福してくれる声が重なりました。

今日は、わたしとハイリさんの結婚式……あの夏にやれなかった、一番やりたかった事。

『おめでとう、紬……幸せになってね?』

一瞬遅れて、懐かしい声が聞こえた気がしました。

なんとなく、その声が誰なのかわかって……わたしは小さく、はい、と答えて、空を見上げました。

今日も、お日様はきらきら輝いていて、わたし達の時間を照らしてくれます。

ヴェンダース・オリジナル

あの70年分の夏の次の年の夏。

わたしとハイリさんとシズクは今年も灯台で一緒に過ごしていました。

「ハイリさん、実は面白いものをみつけたんです」

シズクが買い物に出かけて、二人きりで過ごしていた時のことです。

わたしは少しドキドキしながら、あるお菓子の袋をハイリさんに見せました。

「えっと……なんか紬の名前に似てる名前のお菓子だな。これは、飴？」

「はい、とつても美味しいんですよ。ハイリさんもおひとつどうぞ」

そう言つてわたしは袋の中にはいつている飴をひとつ、ハイリさんに手渡します。

まるで夏の日差しのような……そして、わたしの髪の色のような、金色の包装紙を開けるハイリさんを見ると、よりドキドキが大きくなります。

「うん。美味しいな、これ」

「そーなんです、甘くて美味しいんですよ」

この飴をハイリさんにあげた意味を伏せているのが、少し心苦しく思つてしまいますが、美味しいと喜んで笑顔を浮かべてくれたハイリさんの顔を見ると、まるで自分

の事のように嬉しくなります。

「あら、二人だけで何をしてるのかしら？」

「むぎゆっ!!」

「あ、静久。この飴を舐がぐれてさ」

突然のシズクの出現にびっくりしてしまいました。

当のシズクは、わたしが持っている飴のお菓子の袋をじつと見て何かを考え込んでいます。

「……そっかあ、そういう事なのね。舐つたら、奥ゆかしいんだから」

「むぎゆーっ!!」

これはいけません、シズクにはばれてしまったようです。

大変です、シズクがとても良い笑顔をしてわたしを見ています。

これはわたしにとって、とんでもなく恥ずかしくなるようなからかわれ方をされる時の前触れです、きつとそうです、何回もこの笑顔を見えます。

「どういふことだ？ 静久」

よく解らないといった顔でハイリさんがシズクに聞いてしまいました。

「あのね、パイリ君。このお菓子のキャッチフレーズはね、『こんな素晴らしいキャンデーを貰えるのは、貴方が特別な存在だからです』なのよ……ね、舐？」

先程より良い笑顔を浮かべてシズクが答えます。

やっぱりシズクは知っていました。

そしてこういう時のシズクはやっぱりちよつと意地悪です……むぎゆううう……

「え？あ、つまり……紬さん？」

ようやく意味がわかった……わかってしまったハイリさんは、わたしを見ながら顔を少しずつ真つ赤にしていきます。

わたしも、もうすでに、ハイリさんに負けないくらい、きつと真つ赤になってしまっています。

「それも、ねえ？私が居ない時にこつそりパイリ君にだけなんて……仲が良いのは良い事だけど、寂しいわあ。でも、それだけパイリ君の事が特別な存在だって」

「むぎゆううううー！」

わたしはいたたまれなくなってしまうって、思わずお菓子の袋を落としながら、シズクの話の途中でその場から逃げ去ってしまいました。

「あつ、紬?！」

「あらあら……ふふふ」

「えつと……この反応って事は、紬も意味を知ってた、んだよね？」

「そういう事になるわねえ」

「特別な存在、か……」

「まあ。パイリ君も浸っちゃって……妬けちやうわねえ?」

「あ、いや……うん、そんなんじゃないわ」

「ふふふ。ああ、そういえばそのお菓子……昔は別の名前だったらしいわよ。今通つて大学のドイツの留学生が、あのお菓子が好きで、前に貰った事あるの。その時間いたんだけどね……」

どれくらい走つたでしょうか。

灯台からはそこまで離れていないはずですが、なんだかとても気恥ずかしくて疲れてしまいました。

わたしは近くにあつた少し大きな木の下で座つて一休みする事にしました。

ちよつと冷静になつて考えてみます。

すでにハイリさんとわたしは、特別な存在……なんですから、恥ずかしがる必要なんてないはずですよ。

ただ、少しだけ、ハイリさんに、特別な存在ですよつて伝える事になるのかなつて考えたらずかしくなつてしまつただけです。

そもそも、それはシズクの言っていた通り、ただのキャッチコピーなので、深く考える必要もなかったのではないでしょうか？

味が美味しかったから、ハイリさんにもあげたいと思っただのもあります。

「……紬？」

きつとそれで押し通せば、シズクの意地悪にも胸を張って反論できたはずですよ。

……いいえ、シズクが意地悪だったのではなくて、わたしが考えすぎてしまったのが良くなかったんです。

シズクは悪くありません。

「……紬さん？」

そうですね、すでにハイリさんとわたしは、恋人なんですから、これくらいで恥ずかしくがってはいけません。

堂々と、「そうですね、特別な存在なんですよ！」と胸を張って言えば良かったんじゃないですか。

いえ、これからは胸を張ってそう言います。

「……つーむーぎー？」

「むぎゆっ!？」

自分を呼ぶ声に気付いて顔を上げると、そこにはハイリさんが心配そうな顔をして

立っていました。

「ハ、ハイリさん！いつの間にも！」

「いや、だいぶ前から居たんだけど。ずっと呼んでたし」

「そ、そですか。それはもうしわけないです……」

もう、今日は恥ずかしい事記念日です、今決めました。

「えつとな。はい、これ」

「むぎゆ？」

ハイリさんがわたしの手を取って何かを手渡しました。

これは……私がさつきハイリさんにあげた飴です。

「あ……これって……」

「そういう事だよ。俺にとつても紬は特別な存在だからさ」

ハイリさんはずるいです。

時々、すごい事をさらつと口にしてしまいます。

ものすごく真剣な目で、わたしを見つめながら。

「は、はい……ありがとございます、ですよ？」

きつとさつきより真つ赤になりながら、そして恥ずかしさに一瞬だけ目をそらしてし

まいました。ちゃんとハイリさんの目を見つめ返して答えます。

恥ずかしいけど、すごく、すごく、うれしいです。

「それと、さつき静久から聞いたんだけど、この飴って昔は、オリジナルの部分が……え、えひと？……とか言う名前だったんだってさ」

「えひと、ですか？」

「うん」

首をかしげるわたしにハイリさんは微笑んで答えます。

「意味はドイツ語で、『本物の』……って感じらしい。だからさ、これをあげた紬は、俺にとつて特別な存在で、『本物の』、紬・ヴェンダースなんだよ。改めてそれを伝えたくて、さ」

「あ……」

やっぱりハイリさんはずるいです。

わたしの事を知ってる上で、大好きな恋人にこんな事言われたら、もつともつと好きになつちやうに決まってるじゃないですか……

「って訳で、今日からこのお菓子の名前は、俺達の間ではヴェンダース・オリジナルって事にしよう」

「な、なんですかそれ……わたしは飴じゃないですよおー？」

思わず二人で顔を見合わせて笑ってしまいます。

「紬ー！パイリクーん！」

「あ、静久も来たな……行こうか？紬」

「はい！」

ハイリさんが差し出した手を掴んで立ち上がります。

そしてそのまま、手をつないだままで、ハイリさんとわたしは静久の方へ走っていき
ました。

赤と緑の祭り

「しろは、誕生日おめでとう」

「ありがとう、おじいちゃん」

そんな挨拶を交わす朝。

今日は六月八日、私鳴瀬しろはの誕生日だ。

とは言っても誕生日でもやる事は変わらない。

学校に行き、帰ってきたらいつもの釣り場に出かけて釣りをして、ほどよく釣れたら帰る、そんな普通の日常……今日もそんな日になるはず。

「……」

私は釣り場で釣り糸をたらして海をじっと見つめる。

こうしていると去年の夏の事が思い出されてくる。

鷹原羽依里、去年知り合ってなんだかんだ一緒に遊んで、仲良く……なって、好き……になった、恋び……と？

「でも……」

羽依里は島から離れた場所に住んでいる。

前に少年団の代表として手紙を送ってから、時々手紙でのやり取りや、電話もたまにしたりするけど、会うのは……

「寂しいな……」

「どうかしたのか、しろは？」

「ひゃあ!?……の、のみき……驚かせないで」

「す、すまない……そんなに釣りに集中していたとは思わなくてな」

「あ……ううん、違うよ。大丈夫」

……そ、そんなに私、羽依里の事、集中して考えてたかな？

「なら、いいんだが……それより今日、これから少し時間が空いてないか？」

「え?……うん、特に予定はない、けど」

なんだろう、悪い事じゃないとは思っただけど、幼馴染と言っても去年まではかなり

疎遠になってたからちよつとまだ身構えてしまう。

おじいちゃんに知られたら、まだぼっちが……とか言われちゃうんだろうなあ。

「そうか、それなら良かった。じゃあ、これから一緒に秘密基地に来てくれないか」

「うん。解った」

秘密基地に来たのもだいぶ懐かしい気がする。

去年の夏休みから先は、あんまりここには来てなかったからかな？

「あ、来たわね」

「主役の登場だな」

「よお、しろは」

「こんにちは、しろばさん」

秘密基地には、蒼に天善君に良一君に、何故か水織先輩も居た。

それだけじゃない、他にも二人。

「お久しぶり、鷗だよー！」

「わたしも久しぶりです、シロハさん」

「な、なんで久島さんとワタアメさんも？」

びっくりして目を丸くする私の肩を、後ろにいたのみきがポンつと叩いて笑った。
うう？

「それだけじゃないぞ……おーい」

「もう出ているのか？……あ、えつと……こ、こんにちは」

「えつ……は……は……は、羽依里い!? 何で居る！」

な、なにこれ……なに？

まって、何がどうなってるの？

なんであなたがここに居るの!?

「なんて声出すんだよ、しろは」

「だ、だつて羽依里……え、本物？」

「俺が他に何人も居てたまるか。いや、その……しろはに会いにな？」

「そ、それはうれしい、けど……」

「へえ、やつぱり嬉しいのね、しろは？」

「う、うう……うれしく、ない」

蒼がにやけてこつち見てる！

蒼だけじゃない、みんななんか必要以上に笑顔がやさしいよ!?

「あー……俺はすつごく嬉しい」

！

「わ、私はうれしくない……」

ううん、本当は嬉しい。

「そつか……でも俺は嬉しいんだ」

私も嬉しいよ、羽依里。

「そ、それは羽依里の勝手……うれしく、なんて……」

なのになんか素直に上手く言えない。

「じゃあ、俺が勝手に喜んでく、嬉しいから」

「ううう……どーすーこーいーっ！」

久々にどすこいって言った気がする。

でも、みんなその言葉が結構きつい言葉だつて解ってるのに、みんな笑顔のまま私達を見てる。

羽依里も笑ってる……ううう、きつと本当は嬉しいつてばれちやつてるよ。

「……ごめん、きつく言い過ぎた」

「大丈夫、しろはから言われるのは慣れてるから」

色々頭の中がぐるぐる回つてもう謝るしかなくなつた私をフォローしてくれる羽依里。

……でも、フォローになつてるのかな？これ。

「二人はやっぱり仲が良いんだねえ」

「はい、タカハラさんは灯台の掃除も時々手伝つてくれたりした良い人ですから。シロハさんは、改めて言わなくてもです！」

「そうね、離れてる月日を感じさせない見事の夫婦漫才だったわ」

「う、うるさいな！あと、夫婦じゃない！」

「え、蝶番の儀式したじゃない？」

「あ、う……そ、それは……」

あれは仮初だったから……仮初、うん。

「おい、お前達。それ以上主役をいじめるな。話をすすめるぞ?」

「……話?」

笑いながら私達の仲をはやし立てるみんなを制してのみきが奥にいつて何かを持ってきた。

これは……ケーキ?

「せーの……」

「誕生日、おめでとうー!」

いきなりな展開にぼかんとしてる私を笑顔と拍手でみんなが祝福してくれる。

そっか、みんな覚えててくれたんだ。

「あ、えっと、その……あ、ありがとう」

こんなの照れる! すごく照れる!……でも、それと同じくらい嬉しい。

「さて、じゃあ次はあれだな、誕生日と言えば」

「プレゼントだな」

「そですね」

「まずはもちろん羽依里からね?」

「俺からかよ!？」

蒼に背中を押されて羽依里が私の方へ二・三步前へ出てきた。

一瞬、去年の夏の終わりの事が思い出されて私の心臓が少し早く脈打っているのが自分でも解る。

「え、ええと……誕生日おめでとう、しろは」

「うん……ありがと、羽依里」

羽依里がくれたのは、綺麗に透き通る石が連なって出来たブレスレットだった。

その後はみんな、かわるがわる、思い思いのプレゼントをしてくれた。

ワタアメさんは可愛いぬいぐるみを。久島さんは外国の綺麗なキーホルダー。

のみきと水織先輩からは、ビーチサンダルと日焼け止め、釣りの時使えって事かな？
すごく実用的だった。

良一君と天善君のは……うん、どっちかっていうと自分達の趣味に走った感じかな？

蒼からは蝶をモチーフにした髪留め、これも可愛かった。

こんなにいっぱい人に誕生日を祝われたのはいつ以来だろう……とても嬉しい。

「それとさ、しろは。実はもう一つあってさ」

「え、な、なに!？」

身構える私にみんながちよつと困ったような笑顔で並んで一斉に何かを差し出した

「これ、は……スイカバー!? しかもこんなに沢山!」

「うん、さつき渡したプレゼントとは別に、やっぱしろはが喜ぶのはこれかなと思ってさ」

「あたしも、そう思ってたって持ってきたんだけどね?」

「皆、考える事は同じだったようだな」

「スイカお姉さんでしたから、シロハさんは」

「こう重なってしまってたから、思わず笑ってしまったがな」

「まあ、俺らがしろはのスイカバー好きを知ってるのはともかく、まさか水織先輩や久島が知ってるのは意外だったがな」

「あら、私は紬に聞いたのよ」

「私も羽依里にスイカバーが好きな子が居るって前に聞いてたからね。まさか恋人さんだったとは思わなかったけど」

「私のスイカバー好きどれだけ広がってるの!」

思わず言った私を見てみんな笑った。

なんかちよつと恥ずかしいけど、悪い気はしない、かな?

だから、私もみんなと一緒に笑ってしまった。

「ふふふ……みんな、ありがとう」

今年の誕生日は、
とっても素敵な、
眩いくらいに素敵な誕生日だった。

とある後日談くヤキモチを妬くヒロイン達く

くしろはの場合く

それはある日、羽依里とデートに街に遊びに来ていた時の事だった。

「しろは、待って」

後ろから羽依里の声が聞こえるけど、私は立ち止まる気は無い。

きっかけはささいな事だったけど、私は今すごく怒ってる。

……うん、怒ってるのとは、ちよつと違う。

なんていうか、モヤモヤ？イライラ？

「ついでこないで」

ちよつと自分が言われたら心が痛くなるくらいの強い口調で言ってしまう。

なんだろう、これ……すごく嫌だ。

「なんで急に怒ったんだよ」

「怒ってない」

「いや、怒ってなかったらそんな風に」

「どすこいっ！」

思った以上の声に、羽依里もだけど、言った私もびくつとなつてしまう。

「……羽依里は、あそこですつと、私より可愛い子達でも見ていたら良いよ」

一瞬の沈黙の後で私が言った言葉は、私自身も予想していなかった言葉だった。

言った後で、その裏にある気持ちに気付いて思わずはつとした。

私、羽依里が他の女の子見てたのに妬いてる……!?

「そっか。ごめん、しろは……」

「謝らなくていい」

胸の中に、恥ずかしさと、行き場の無い気持ちがあつて、ついそっぽを向いてそう答えてしまう。

「あのさつき見てた女の子がつけてた髪飾り、しろはに似合いそうだなあつて思つて見てたんだ」

「ほら、やっぱり見とれて……ええ?」

「だから、女の子じゃなくて、髪飾りがさ」

「え、ええええ!?!」

「しろは、あんまりそういうアクセサリーつけてるところを見たこと無いからさ、ああいうのつけたら可愛いかなつて」

「な、なんで唐突に可愛いとか言う!」

「え……だってしろはなら似合いそうだし、可愛いだろうなって」
「なんで二回も！」

な、なんか……えつと……ええ!?

思ってもない話の流れになってどう答えて良いかわからないよお。

「……なあ、しろは？」

「え!?!……は、はい」

「さっきの子がつけてたのと同じのは無いかもだけどさ。これから一緒に、しろはに一番似合いそうなのを探しにいかないか？」

「う……う、ん」

真っ赤になっちゃって、うつむいてそう答えるのがやつとだった。

そっか、羽依里は他の子見ても私のこと考えてくれてたんだね……嬉しい。

「羽依里」

「ん?どうした、しろは？」

「……ありがと」

ちよつとだけ顔を上げて、それだけ言って、私は羽依里の手をそつと握った。

く蒼の場合く

ある夏の日。

あたしは羽依里と藍と三人で海に遊びに来てたんだけど……

「くおおらあああ！藍の方ばかり見ない！」

く、屈辱だわ……あたしも多少はプロポーションには自信はあったけど、やっぱり藍の身体って綺麗だわ。

それに、いくらあたしでもあんな藍みたいなきわどい水着は……む、無理だわ！

「そうですね。蒼ちゃんがこんな素晴らしい格好をしているのに、蒼ちゃんを見ないなんて罪深すぎます」

「わ、解ったから藍はもう少し身体を隠してくれ……男子校卒の俺には、刺激が強すぎるんだって」

「羽依里さん、あなたの蒼ちゃんへの愛情はそんなもののですか？私がこの程度の姿で居るだけで目移りしてしまうようでは蒼ちゃんは渡せませんね」

なんかあたしを抜きにしてあたし争奪戦が始まつてる!?

いやいや、突っ込むべきはそこじゃなくて！

「そ、そうよ羽依里！あたしも……その、見てよ」

「蒼……」

勢い任せでちよつとだけ胸を強調したポーズをとったところに、言われて顔をこつちに向けた羽依里の視線が突き刺さってくる。

こ、これはこれで恥ずかしいわ!?

「……あたしじゃ、やっぱり藍より物足りない?」

「い、いや……そうじゃなく、て……ぶはあ!」

「羽依里!?!」

…

……

……

「……あ、あれ?」

「あ……気がついた?」

「うん」

近くにあつた海の家の座敷で、あたしの膝の上に頭を乗せた羽依里が目を覚ました。

ま、まさかあれで鼻血を出してぶっ倒れるとは思わなかつたわ……男子高卒恐るべし、ね。

「……」

「羽依里?どうしたの?」

「また鼻血でそう」

「うええ!?!なんで!?!」

「いや、ほら……俺の目の前に二つ、素晴らしいのが」

目の前って言うと、羽依里は仰向けであたしの膝の上に頭を乗っけてて、だから……
「きやああああ!」

「ぐわあ!?!」

思わず叫んで取り乱しちやって羽依里の頭を下に落としてしまった。

ああ、痛そう……ごご、ごめん羽依里。

「ごご、ごめん!大丈夫!?!」

「あ、ああ……」

羽依里がよろよろと起き上がってそのまま座敷に座り込む。

ちようど真正面で向き合うみたいな感じになって、なんかいたたまれない。

「えっ、と……さ、羽依里?」

「うん?」

「なんか、変に張り合って鼻血まで出させちゃってごめんね」

藍に目が行ってたのが、なんか悔しくて、それがやきもちなんだってのも解ってたか

ら、あたしは素直に謝った。

「いや、謝る事ないぞ?」

「え?」

「だって、蒼は俺の恋人なんだからさ。むしろ俺の方がごめん」

羽依里から返ってきたのは予想外の答え。

「だ、だけど、あたしなんか変に対抗意識燃やしちやって……羽依里をこんな目に合わせちやったし」

「俺としては、それは嬉しいけどな? 妬いてくれたって事だし、良い物見れたし」

「良い物?」

「可愛い恋人の悩殺姿」

「う……うああああ! 忘れて! 今すぐ忘れて!」

「いや、絶対忘れない」

「ああああああああ!」

羽依里に笑われながら、真っ赤になったあたしの絶叫が夏の海辺に響いた。

く 鷗の場合く

「羽依里のばかぁー！」

ちよつと用事が出てくるって羽依里が一人で出かけたのが気になって、街で見かけた羽依里の様子を見て、そう言つて一人で宿の部屋に戻つて……そんなこんなで布団に丸まつてからもう小一時間。

私はまるでだんご虫みたいになつて過ごしてた。

「せつかく一緒に旅行に来てるのに、ひどいよ羽依里……ふみゆう」

文句は言うけど元氣は無い、それが今の私。

そりや、外国の街だし、私よりスタイル良い子や、綺麗で可愛い子も一杯居るけどちよつと話しかけられただけでデレデレしちゃつてさ。

羽依里はエロい！もう羽依里じゃなくてエロ里に改名しちゃえば良いんだよ！

「鷗……ここくらいしか無い、よな？行き先なんて」

きた！エロ里が帰つてきた！

でも返事なんかしてあげないもん。

「やつぱり。鷗ー？鷗さーん？」

ふーんだ。

「……なあ、出てきてくれよ。せつかくの旅行なんだから楽しもうぜ？」

「ふぎー！ふぎー！」

「えつと、確かこれは求愛？」

「違う！これは威嚇！……あつ」

思わず答えちゃった！

「……やっぱり、なんか勘違いしてないか？街に出てた俺の姿見た後、急に走り出して居なくなっちゃったし」

「ど、どーせ羽依里はナンパとかしてたんでしょ？あんな楽しそうに女の子達と話して

……もう羽依里はエロ里だよー」

「な、なんだその良く解らないけど不名誉なあだ名は」

「だって羽依里がエロイから！」

「ああ、もう……ほら、これだよー！」

そう言つて羽依里は布団から顔だけ出した私に何枚かの用紙を手渡した。

……え、これつて。

「ほら、鴫のスーツケース……あれに更にもっと一緒に行ったとこの記念になるものつけてたらつて思つてさ。この街らしいシールとか売ってる店が無いかって聞いてたんだよ」

「え。じゃ、じゃああの女の子達と楽しそうに話してたのは!？」

「あー……それは、これ」

羽依里が懐から出したのは一冊の手帳のような本。

「俺、この国の言葉解らないから、身振り手振りで、このミニ辞典で翻訳して片言で話しながら説明してさ。それがあの子達には面白かったみたいで」

そ、そうだったんだ……確かに羽依里がくれたのは、どれもこの街や国に関係あるシールばかり。

「……ごめんね、羽依里」

布団から出て素直に謝ると、なんでか羽依里は笑ってた。

「俺がもう鴟を一人ぼっちにするわけないだろ？」

「あ……う、ん……えへへ」

そうだよね。

あの島での時も、最後まで付き合ってくれた。

その後だって、私を諦めずにいてくれて、出会えた。

どうかしてた、そんな羽依里を疑っちやうなんて。

「羽依里」

「うん？」

「ごめんね、やっぱり羽依里は羽依里だったよ」

なんだかんだ言っても私の事をちやんと考えて大事にしてくれる。

そんな羽依里の事が……

「好きだよ、羽依里」

—終—

く紬の場合く

わたしは灯台の中に置いてある姿見の前で自分の身体を見ました。

そして、去年の夏に仲良くなった女の子のみなさんの身体を思い返してみます。

「……むぎゆう」

やっぱり、足りません。

ハツテントジョーなのは仕方ありませんが、身体は女の武器という話も、昔聞いたことがあります。

「ハイリさんも、やっぱりみなさんのような方が好きなのでしょうか……」

そもそも、わたしは成長するんでしょうか？

今までそんな事を思った事はありませんでしたが、わたしはこの身体になってからずっとツムギちゃんと同じままです。

ずっとこのままで、そのうちハイリさんにとつてもっと魅力的な身体の女性が現れて、ハイリさんをとられそうになったら……

「ちみどろになつてでも、あらそいます……むぎぎぎつ」

だめです、ハイリさんは誰にも渡したくありません。

シズクは……百歩譲つて三人で一緒ならおーけーです。

でも、それ以外の人には……やっぱりだめです。

「むぎぎぎぎぎつ」

「紬、どうしたんだ？」

「むぎゆっ!？」

後ろからかけられた声に思わず身体がびくつとなつてしまいます。

そこには心配そうに見ているハイリさんが居ました。

「え、えとですね……な、なんでもありません」

「何でもない事無いだろ。更によえば、何か変にヤキモチ妬いてたんじやないか？」

「むぎゆうっ!？」な、なんでわかるんですか!……あつ」

「ほら、やっぱり……前に嫉妬してた時の顔だったし」

やっぱり嘘と隠し事は出来ないようになってるものです。

ばれてしまったので仕方なく、わたしはハイリさんに全てを話しました。

「そっか……だけど、俺は紬の事が全部好きだから、さ」

「……でも、ハイリさんは時々静久の胸をもものすごく見つめてる気がします。この前聞いた、ガン見というやつです」

「うっ……そ、それは静久相手だからだよ、うん」

なんで目をそらすんですか、ハイリさん。

じーつと見つめていると、急にハイリさんが真面目な表情で私の方に振り返りました。

「なあ、紬」

「は、はい」

「俺はもう紬と70年分のイベントをして……最後まで一緒に過ごす約束したんだからさ。何処にも、誰にも行かないよ」

「……ハイリさん」

そうでした、ハイリさんはシズクと一緒にわたしと70年分のイベントを一緒にしてくれました。

そしてその次の夏にわたしが戻ってきてからも、今までと同じように、いいえ、それ以上に、楽しい事をいっぱいして過ごしてくれています。

「そ……です、ね。そうでした。ごめんなさい……」

「いいんだよ。それだけ、心配になっちゃうくらい、俺の事が好きだって解ったしさ」

「そ、そうですね！わたしはハイリさんの事が大好きです！すごくすごく大好きです！」

「……あらあ？改めて紬の方から告白してるのかしら。とつても可愛い告白ねえ」

「むぎゆっ!?シ、シズク、いつから居たんですか!？」

「えっとお……パイリ君の『俺はもう紬と』の辺りだったかしら」

「俺のも聞いてたのかよ！」

ハイリさんがそう言った後、誰からともなく三人一緒にしばらく笑い合ってしまった。ました。

わたし自身の成長の事とか、やっぱり……発育の事以外でも……不安は、あります。

けど、三人で……シズクと、そして何よりハイリさんと、一緒に笑い合える今を大切にしていきたいと思いました。

—終—

星に願いを　　紬の七夕

俺は今年も鳥白島に来ていた。

そして去年同様に鏡子さんの所でお世話になっている。

一年経っても蔵の整理が終わっていないから、その手伝いも兼ねてだ。

「あらあら」

「どうしたんですか、鏡子さん」

一緒に蔵の整理をしていた鏡子さんの声に、俺は顔を上げる。

「こんなものが出てきたの」

「これは浴衣ですか？」

「ええ、でも大きき的には大人が着るには小さいって感じの浴衣ね。柄も、華とお魚の可

愛らしい物だし」

そんな浴衣がなんでここに……と考えていた俺の目の前に、一枚の紙切れが落ちる。

「これ、何か書いてあるな」

紙切れを拾って、書いてある文字を読んでみた。

「これって……」

その内容に思い当たる事があって、俺は鏡子さんに一つ頼み事をしてみた。
「鏡子さん、もし良かったらその浴衣、俺にもらえませんか？」

*

わたしは灯台の中で掃除をしながら、今日も二人を待ちます。

ハイリさんとシズク……去年の夏、一緒に遊んで、大好きになった大事な二人です。
今年もわたしと遊びに、この島へ来てくれています。

「~~~~♪」

去年で最後だと思っていた、たのしい夏。その夏をまたむかえられる事がうれしくて、わたしは自然と鼻歌を歌ってしまいます。

ただの掃除も、二人をむかえる為のお掃除だと考えると、自然と顔がにやけてしまったりもします。

「あら……ご機嫌ね、紬。」

「むぎゆっ?! シズク、いつの間……」

おどろいて振り返ると、そこには笑顔でわたしの方を見ているシズクが立っていました。

「一応ノックして入り口から入ってきたんだけどなあ。お掃除に夢中で気付かなかったのかしら?」

「す、すみません、気付きませんでした……ハイリさんとシズクが来る事を考えてて」

「それでにやけちゃったのね……もう、嬉しい事言ってくれちゃって」

「むぎゆつ?」

そう言つてシズクはわたしをむぎゆつと抱きしめました。

すぐくうれいですが、ぎゅつとされるのはやっぱりちよつと照れます……むぎゆう。

「シ、シズク……いきなりは、ちよつと照れます」

「えー?その照れてるのがいいんじゃない?ふふふ」

あ、この笑顔は意地悪なシズクの顔です。

時々シズクは意地悪になります。でも、シズクの意地悪はあんまり嫌じゃありません。わたしの事が好きだからするんだと、解つていますから。

「そうね……シズクは本当は私よりもハイリ君にぎゅつとされたいわよねえ?」

「むぎゆうつ!?そ、そんな事はありません……」

にこにこ笑顔でシズクがわたしの顔を見つめています。

「……ハイリさんにも、シズクにも……ぎゅつとされるのは、好きですよ?」

「はい、素直で結構」

嘘はいけません。観念して正直に言うとかスクスと笑ってまた優しく抱きしめてくれます。

なんだかちよつと、負けた気分です……むぎぎぎぎ……

でも、シズクに抱きしめられるのは本当に好きです。ツムギちゃんにむぎゆつと抱きしめられていた時の事を思い出して、なんだか心まであたたかくなります。

「……ずるい、俺も紬をぎゆつとする」

「むぎゆ!? ハ、ハイリさん!」

「あらあら、ヤキモチ妬かせちゃったわねえ、ふふ」

いつの間にかハイリさんまで来ていました。二人ともまるで忍者か何かみたいですが、気配を感じさせません。

「灯台の入り口が開いていたから、もう静久が来てると思ってたけど、こんな事になってるとは」

「ふふふ、今日の紬は私が一番乗りよ?」

「負けるものか、俺も!」

「むぎゆううう!?!」

シズクと逆方向から、今度はハイリさんまでわたしをむぎゆつとしてくれます。

こ、これはシズクとは別の意味で恥ずかしいです！後ろからハイリさんにぎゅつときれちやつてます！むぎゆううう！

「あらあら、やつぱり紬はパイリ君の方がいいのねえ。私の時より顔が真っ赤でタコさんみたいよ？妬けちやうわあ……」

そう言いながら、さつきよりも楽しそうな笑顔でシズクがわたしを離します。

そうなる後ろから抱きしめてくれているハイリさんの存在がものすごく感じられて……むぎゆううう……

「パイリ君、そろそろ紬、限界みたいよ？」

「え？……あ、うん」

シズクに言われてハイリさんがそつと離れます。

よかったです……あのままでわたしは本当にシズクの言うようにタコさんみたいになって、ふにやふにやになってしまふところでした。

「それで、今日は何をしようかしら？」

「あ、それなんだけどき。ちよつと俺の家の方へ来てくれないかな？」

「まあ、俺の家つて……御両親に挨拶と言うやつかしら」

「ち、違う！今年もお世話になつてる鏡子さんのところだよ」

「あら残念。本当に挨拶に行くなら、私は仲人よねつてはりきつてたのに」

「おいおい……つて、紬?」

「むぎゆっ?!……す、すみません、ぼーっとしてました」

い、いけません。うれしいのと恥ずかしいのがいっぱいペンに来て、ぼーっとしてしまいました。

「えつと……今から鏡子さんのところに一緒に行きたいんだけど、良いかな?」

「はい、ダイジョブです!」

まだちよつと頬が熱くて、自分でも真っ赤になると解ります。

でも内心の動揺をさとられるわけにはいきません。なので少し気持ちを落ち着けて、笑顔で答えます。

そんなわたしをハイリさんとシズクがじーっ見つめてきます。

「やっぱり可愛い」

「むぎゆうううう!」

またしても二人で、同時にわたしを抱きしめてきました!

うれしくて、幸せですけど、とてもとても恥ずかしいです!

*

俺は、紬と静久と一緒に蔵の中へ来ていた。

勿論鏡子さんには許可を取ってある。

「これだ」

「これは……浴衣、ね」

「そうですね。とつても可愛い柄です」

箱から取り出した浴衣をまじまじと見つめる二人。

「なあ、紬。これ、着てみてくれないか？」

「むぎゆう？わたし、ですか？」

手にしていた浴衣を紬に差し出して聞く俺に小首をかしげて答える紬。

「そうね、この大きさなら、紬なら着れるんじゃないかしら？」

「……確かに、シズクは無理そうですね」

紬の視線が静久のある一点に注がれている気がしないでも無いが、そこは敢えて気付かなかつたふりをする。

「鏡子さんには、着れるなら紬にあげても良いって言われてるんだ」

「そ、そうなんですか……じゃあ、お言葉に甘えて着てみますね」

「ああ。頼むよ」

手にした浴衣を紬に手渡し、俺は一旦蔵から出る。

中からは紬と静久の話し声が聞こえてくる。

俺の予想が合ってるなら、あの浴衣は多分……

「パイリ君ー！入っていいわよー！」

蔵の中から静久の声が聞こえて、俺は先程閉めた蔵の戸をもう一度開ける。

「……紬」

「ど、どうでしょうか……ハイリさん」

そこには、浴衣を着た紬が立っていた。まるで誂えたかのように良く似合ってる姿。そしてそんな紬の後ろから、明かり取り用の窓から光が差し込んで、まるで後光のように金色の髪をきらきらと輝かせて。

「女神みたいだ」

「ー……む、むぎゆうう……」

思わず口から出た言葉。それを聞いて頬を赤らめて目を泳がせる紬。そんな紬を見て俺も何だか恥ずかしくなって目を逸らしてしまう。

「あら、目を逸らしちゃダメよ？恋人さんが可愛い彼女の綺麗な姿を見ないで、どうするのかしら？」

「あ、ああ。そうだな、うん」

そんな俺達の様子が面白かったのか、からかいながら静久がクスクスと笑ってる。

……ああ、でも、そうか。やっぱりこれは……

「……なあ、静久。もうすぐ何処かで祭りがなかったつけ？」

「んー……：：：～、七夕のお祭りが街の方であつたような気がするわ」

「お祭り！ 楽しそうですね！」

「よし、それだ」

「え？」

「紬、その浴衣を着てお祭りに行こう」

「え、あ……：：：：：：：：～いいんですか？」

「ああ。勿論静久も一緒にな？」

「ええ、そういう御誘いなら大歓迎よ？」

「三人でお祭り……：：～いいですね！ 行きましょう、ハイリさん！ シズク！」

「決まりだな。楽しい七夕にしようぜ」

そう言つて、三人で顔を見合せて笑顔で頷いた。

*

七夕当日、わたしはハイリさんにもらつた浴衣を着て、三人でお祭りに出かけました。

とてもきれいな華を咲かせました。

「すごいです！カンドーです！」

「ああ、すごいな！」

「ふふ、まだまだこれからよ？」

夜空にどンドン花火が上がっていきます。赤、青、緑、黄色……様々な色がまたたいています。

「紬、あのさ」

「むぎゆ？」

三人で花火を見ていると、急に、ハイリさんがわたしの方へ向き直って、ちよつと真剣な顔をして話しかけてきました。

「その浴衣さ、すごく丁寧に蔵にしまってあったんだ。このメモと一緒に」

そう言つてハイリさんは、わたしに一枚の紙を手渡しました。

そこにはこう書いてありました。

『あなたはあなた。あなたの幸せを願つてこれを。いつか、これを着て、楽しい夏を過ごしなさいね』

「多分、ばあちゃんが紬の為に用意してたんだと思う。サイズもぴったりだし、柄も、紬によく似合う可愛いやつだしさ」

「カトーさんが……」

たぶん、ハイリさんの言っている事は間違いないと思います。

この紙と書かれていた文章からは、あの日に感じた懐かしい気持ちと、暖かさを感じましたから。

「だからさ、その浴衣は、元々紬の物なんだよ……って、俺は思ってる」

「そ、ですか……すごく、うれしい、です、ね」

気付いたら、わたしは、泣いていました。

悲しくはありません、実際今ものすごく笑顔です。

でも、カトーさんの気持ちと、ハイリさんの気持ちがあるものすごくうれしくて……どんな涙があふれてきます。

「……紬、よかったわね」

「はい……」

いつの間にかすぐ横に座っていたシズクが、わたしを横から抱きしめて、頭を撫でてくれました。

ハイリさんも横に座って、ずっとわたしの手を握ってそばに居て笑ってくれていました。

「……そうだ。これ、配つてたからもらつてきたのよ。七夕なんだし、せつかくだから皆で願い事を書いて一緒に吊るしましょう?」

たくさん泣いてしまつて、ようやく落ちついたわたしと、ハイリさんに、シズクが短冊をくれました。

「はい、ペンも……もらえたのはこれ一枚だけだから、慎重に書いてね?」

「そういえば、去年も灯台で竹持つてきて七夕したよな」

「そうだったわね。竹でやる七夕も面白かったわよね」

「ああ、そうだつ……」

「出来ました!」

願い事を書くのなら、今のわたしには一つしかありません。

すらすらと書いてしまいました。

「え?」

「早いわね、なんて書いたのかしら?」

「これです!」

わたしが二人に見せた短冊に書かれていたのは……

『毎年楽しい夏を三人で過ごしたい』ね……あら……ふふふ、うん、いいんじゃないかしら、紬」

「そ、それは良いんだけどさ。その下のそれ」

「そこはあんまり見ちゃダメです!……む、むぎゆう……」

照れながらも笑顔で自信満々に書いた短冊を見せるわたしと、それを見て同じように照れ笑いを浮かべるハイリさんと、短冊とわたし達の様子を見て笑っているシズク。

そこには夜空の花火に負けない笑顔の花が、いっぱい咲いていました。

『毎年楽しい夏を三人で過ごしたい 鷹原 紬』

誕生日の夜に　　く星に願いをく

今日、8月31日は、わたしの誕生日です。

でも、去年までは、わたしには誕生日はありませんでした。

去年の夏……ハイリさんとシズクが決めて、みんなで祝ってくれました。

そして今年、再び灯台に、この島に戻ってくる事が出来たわたしを、みなさんは受け入れてくれて、誕生日も盛大に祝ってくれました。

いっぱいワタアメや、シズクが用意してくれたケーキをみんなで分けて食べたり、ノムラさんとミタニさんの漫才や、カノウさんの卓球講座なんかもありました。

シロハさんは得意料理のチャーハンを作って持ってきてくれたり、アオさんも、カキ氷機を駄菓子屋さんから借りてきて、みんなでいっしょに頭がキーンとなるまで、食べたりしました。

更にはなんと、プレゼントまでみなさんで用意してくれました。

プレゼントは二つのぬいぐるみで、青い恐竜のぬいぐるみと、顔のかかれた丸い団子のぬいぐるみでした。

二つともとても可愛くて、すぐに仲良くなれそうな感じですよ。
そうして夕方まで、わたしのお誕生日会は続きました。

*

「それじゃあ、あたし達は帰るわね。あんた達はまだ居るんでしょ?」

「ああ、せつかくだから今日は俺と静久は泊まっていいこうかと思ってる」

ハイリさんの言葉を聞いたアオさんがみるみる顔を真っ赤にしていきます。

「と、泊まるって……恋人とは言え男女二人で一緒に寝泊りするってだけでもアレなのに、まさかの三人!?ダメよ、さすがにダメよそんなの!いくら仲良しだからって三人でなんて常識的にかんが」

「じゃあ、私達は帰るね」

「いくぞ、蒼」

何だかとても興奮して上の空でぶつぶつと何かを言っているアオさんを、シロハさんとノムラさんがひきずって行ってしまいました。

*

*

二人が寝てしまった頃、わたしは起こさないようにそっと布団を抜け出して、灯台の屋上へ出ました。

そこから見える景色は、屋内で見上げるよりも、とてもきれいで、広くて、周りの世界がすべて星の海にのまれてしまったみたいです。

わたしはそんな星空を見上げながら、胸の前で両手を組んで、そっと星に願います。
どうか……

「……紬?」

「むぎゆっ!? ハ、ハイリさん!」

突然後ろからした声にびっくりして振り返ると、屋上の入り口にハイリさんが立っていました。

「す、すみません。起こしちゃいましたか?」

「いや、目が覚めたら紬が居なくなっていたから……探してたんだ」

月明かりに照らされたハイリさんの顔は、とても真剣でした。

そうでした、去年の今日は、ハイリさんとシズク……二人とお別れした日でした。

「すみません、ハイリさん……ダイジョブです、わたしはもう、居なくなりませんか?」

心配をかけないようにと、出来るだけ笑顔で答えました。するとハイリさんは、黙って近づいてきて、そのままわたしをぎゅつと抱きしめました。

「むぎゅ?! ハイリ……さん?」

「うん……ずつと一緒になってくれ。な、紬?」

少しだけ、ハイリさんは震えていました。

それに気づいて、わたしも急に色々な想いがこみ上げてきて、思わずハイリさんを抱きしめ返していました。

「……はい、もう、消えません。ずつと一緒ですよ?」

自然と、ぼろぼろと涙があふれてきます。

ハイリさんの暖かさにふれて。

そして、一緒にいてほしいと言ってくれる事がうれしくて。

気づいたら、ハイリさんも、同じように泣いていました。

わたし達は、そのまましばらくの間、ぎゅつと抱きしめ合っていました。

*

「……………そう言えば、なんで紬はこんな夜中に屋上に？」

二人で並んで屋上に座って、星をながめながら、ハイリさんが聞いてきます。

「えとですね……………お星様にお願いをしようかと思ひまして」

わたしはそう答えて、笑顔を浮かべて、続けました。

「ずっとずっと、一緒にいられますように……………です」

「三人で、か……………そうだな」

「あ、えと……………それはもちろんですけど……………」

「ん？」

ハイリさんが、わたしの方を見つめてきます。

「こ、これを言うのはちよつと……………いえ、かなり恥ずかしいのですが……………」

「ハイリさんと、です。ハイリさんと、ずっとずっと、一緒にいられますように……………」と、

お願いしよう……………かと……………」

ダメです！ハイリさんの顔が見れません！

最後の方はうつむきながらになってしまい、思わずハイリさんから視線をそらしてし

まいました……………むぎゆううう……………

「……………紬」

「な、なんででしょうか？」

「ちよつと、こつち向いて?」

うう、きつとわたしは今、顔中真つ赤です。

それでも、ハイリさんの方へゆつくりと向きました。

「んっ!?!」

ハイリさんの方へ向いたわたしの顔に、ハイリさんの顔が近づいて……

「……ありがとうな、すごく嬉しい。俺もずつと細と一緒に居たいよ」

「……ハ、イリ……さん?」

頭の中が真つ白になりながら、わたしはハイリさんの名前を呼びます。

後になって考えてみれば、この時のわたしは、まるで自分が自分じゃないみたいでした。

だからきつと、こんな大胆なことが言えたんだと思います。

「ん?」

「もういつかい……してくれませす、か?」

「え!?!あ、ああ……うん……」

目の前のハイリさんの顔が、ものすごく真つ赤です。

いえ、きつとわたしの顔も真つ赤です、きつと負けてません。

でも、真つ赤になりながら、ハイリさんは、顔を近づけて……わたしのお願いを聞い

てくれました。

この日の夜の事は、ハイリさんとわたし……それと、二人を見守ってくれていた、星達だけの、秘密です。

眩しさを抱きしめて Happy Birthday

私の周りには、とても青い景色が広がっていました。

まるで海のような、空のような、綺麗でどこまでも続く青です。

その景色の中を、私はゆつくりと進んでいます。

『これでよかったですよ、ね』

もう何度目になるか解らない言葉を、口癖の様に呟きながら。

自分に言い聞かせる様に、誰かに問いかける様に。

何度も……何度も……

『……さみしいな』

そして、何回かその呟きを繰り返した後には、必ずその言葉が出てきてしまいます。

お母さんを助ける為に、頑張った事は、悔いはありません。

でも、やっぱり……寂しいです。

あの夏は、あの繰り返し続けた夏の日々は、とても楽しくて、嬉しくて、眩しくて。

今でも私の心に、色褪せる事無く、輝きを残しています。

……だけど、それを憶えているのは、私だけ。

あの夏の日々は、もう誰の記憶にも、心にも、残っていません。

『……おカーさん……おとーさん……』

涙が出てくるのも、もう、何度目でしょうか。

お母さんも、そしてお父さんも……今度はきつと幸せな未来が待っているはずですよ。けれど、そこには私は居ません。

お母さんとお父さんも、きつと出会う事は無いのではないかと思います。

だとしても、それでお母さんとお父さんを悲しませる事が無くなるのであれば……

私は涙を拭って、再び果てのない青い世界を進んでいきます。

誰も覚えていない、けれど私は覚えています。

お母さんやお父さんだけじゃなくて、色々な人と出会って、仲良くなって、毎朝体操をして、蚊にもいっぱい刺されました。

鏡子さんの手料理を最初に食べた時は、目の前が真っ暗になったのを覚えています。

蒼さんには何度も夏を巡る間、駄菓子屋に通ったりしている時に沢山お世話になりました。

久嶋さんがメイド服姿で家に来た時は、とっても驚きました。

紬さんには歌を教えてもらいました、お母さんと一緒に歌うのは楽しかったです。

野村さんには、相談をしたりした夏もありました、とても頼りになる人です。

三谷さんと加納さんは、最初は苦手でしたけど、二人とも良い人なのが解ってからは、そんなに怖くなくなりました。

すぐに脱ぐのと、特訓をしだすのは、最後まで慣れませんでしたけど。

お爺ちゃんとも、楽しい夏を過ごせた事が何度かあります、見た目は怖いけど、優しいお爺ちゃんでした。

大丈夫です、私にはあの夏の日々があります。

私だけは、覚えていきます……あの、キラキラ輝いていた夏休みの日々を。

ふっと顔を上げた私の目の前に、小さな光が見えました。

この世界に辿り着いてから、見た事が無い、初めての現象です。

じつとその光を見つめていると、だんだんと大きくなっていき、目の前がまばゆい光でいっぱいになってしまいました。

思わず私は目を閉じます。

……少しして目を開くと、そこには見慣れた男の人が立っていました。

男の人まぶしかった様で、目をくらませています。

『おっ……』

言いかけて、私は止めました。

もしここで私が話しかけてしまったら……お父さんと、お母さんは、どうなってしまう

うのか。

それを考えてしまいました。

でも……でも……自然と笑みがこぼれます。

きつとこれは、寂しがり屋な私への、最後の奇跡なんだと思ったのです。

本当にこれが最後だったとしても、お父さんにまた会えたのが嬉しかったから……私は自然と微笑んでいました。

「うみ!!」

突然、お父さんが私の名前を呼びます。

そんな……覚えてるはずは……

「帰って来いよ!!」

……お父さん……忘れてなかったんだ……覚えててくれたんだ……

私は泣きそうになりながら、でもお父さんの言葉に応えたくて、めいっぱい笑顔を見せました。

それを見て、お父さんも微笑んでくれた様な気がします。

次の瞬間……また周りが強い光に包まれ、その光が収まった時には、もうお父さんの姿は消えていました。

そして、お父さんが立っていた場所には、いつかの虹色の紙飛行機が、落ちていまし

た。

『……………うん、また会おうね……………お父さん、お母さん……………』

そつと紙飛行機を拾い上げて、それを抱きしめた瞬間、私の目から一筋の涙がこぼれました。

何故か、必ずまたお父さんとお母さんに会える……………そんな予感がしていました。

「羽依里、あの……………」

「どうしたんだ、しろは？」

「えつと、ね。私、お腹の子の名前……………考えたんだけど」

「ああ、うん。実は俺も考えたんだ」

「そうなんだ。……………ねえ、羽依里……………せーので一緒に言ってみない？」

「考えた名前をか？」

「うん」

「そうだな……………意外と一緒だったりしてな」

「……………実は、そんな気がする」

「そっか……………実は俺もそんな気がするんだ。じゃあいくぞ、せーの……………」

『ありがとう。
お母さん、
お父さん』

最高のプレゼント

それは、俺の元に掛かってきた一本の電話から始まった。

『パイリ君、久しぶり』

『うん。静久の方は元気だったか?』

『ええ。』

春間近と言っても、まだ肌寒い日が続いている。

けれど徐々に静久の声を聞いた俺は、あの暑くて熱かった夏の日々を思い返していた。

『パイリ君……突然で悪いんだけど、今度の水曜日は空けられないかしら?』

『水曜日?……あつ……』

壁にかかっているカレンダーを見て確認すると、その日は3月の14日。

『ホワイトデーか。』

『そうよ……紬に、バレンタインチョコ貰ったんでしよう?』

『うん、お返しに行かないとだな』

学校は休みじゃないけど、元々あんな感じで夏前くらいから休んでた訳だし、今更少しくらい休んでも変わらないよな。

って言うか、学生の本分と、紬を天秤にかけたら……そりや、紬だよな、うん。

そんな事を考えながら、俺は静久と共に、ホワイトデーの日の打ち合わせをし始めた。

3月14日、俺は鳥白島の港に居た。

どうしてもまた鳥白島に行かなければならないと家族を説得して、13日から15日まで学校を休む許可を取り、何とか今ここにいます。

以前だったら、家族……特に父親に、自分からそんな風に話をするなんて事は無かつただろうし、そんな気力も湧かなかつたと思う。

とにかく紬にホワイトデーのお返しをしたいから……いや、もつと言えば紬に会いたいから。

ただその為だけに、これだけのやる気を出せるという事に、自分でも驚いていたりする。

(夏にここに着いたばかりの俺が知ったら、びっくりするだろうなあ)

「あ、パイリ君」

自分のちよつとした成長?に少し感動していると、俺の後ろから聞きなれた声がし

た。

「静久」

「いらつしやい、パイリ君」

「いらつしやいって……静久も島に着いたばかりなんだろう？」

「ふふふ、まあね」

二人で微笑みながら、他愛も無い会話を……たつたそれだけの事で、とても楽しくなつてくる。

でも、ここに……

「さあ、行きましよう？二人で話をするのも楽しいけど、早く行かないと紬がむぎぎぎぎぎぎぎぎーって嫉妬しちゃうわ」

「はは、そうだな。……って、紬は俺達が来る事を知ってるんだ？」

「うん。天善君に頼んで、灯台まで手紙を届けてもらって知らせてあるわ」

「そつか……急に行つて驚かせたりもしたかつたけどな」

「こら、今日の主役に意地悪しちや駄目でしょ？」

「あー、それもそうか」

そんな風に話をしながら俺達は、見知つた道を歩いて懐かしの灯台に向かつた。

「さ、さすがに寒いわね……」

「だな……」

灯台は夏に来ていた頃と変わらない様子でそこにあった。

ただ、夏に比べて寒いのと、海の様子とかはやっぱ夏の時とは違っていた。

……でも、間違いなく、あの変わり者の、灯台の女神が住んでいる、灯台だ。

俺の大好きな、恋人の住んでいる、灯台だ。

「パイリ君、入りましょう？さすがにこのまま外に居ると凍えてしまうわ」

「あ、ああ……そうだな」

俺はコンコンと灯台の入り口のドアをノックしてから、ゆっくりとドアノブを回す。

静久が事前に俺達が来る事を連絡していたおかげか、鍵は掛かっていないようで、少しキイという音を立てて、灯台入り口のドアは開いた。

「……暖かいな」

「暖かいわね」

灯台の中は、不思議なほど暖かかった。外の寒さや風が入ってこないというだけじゃなくて、本当に、暖房でも入っているんじゃないかってほどに、暖かかった。

「絨、入るぞー？」

声を掛けてから、俺達は灯台の中に入っていく。少し木枠の端が欠けた窓。頑丈だけ

どところどころ小さなヒビが入っている階段。そうした灯台の中の見慣れた様子を眺めながらゆつくりと上の階へ上がっていくと、そこには昼間から猫の着ぐるみを着込んでいる紬が居た。

「……すうー……」

そして、その猫は丸まって部屋の片隅で寝ていた。その表情は穏やかであどけなくて、見ているだけで自然と微笑みが浮んでしまうような、とても愛嬌のある姿だった。

「いや、猫は丸くなるって言うけど、あれって灯台の中でだっけ?」

「コタツだけど……さすがに紬でも入って丸まるのはちよつと無理よねえ」

そんな事を言つて、二人で顔を見合わせて笑う。

でも、とても可愛い紬の寝姿だけれども、寝たままだどうしようもないので、起こす事にする。

「紬、紬……気持ちよく寝てるところ悪いけど、起きてもらつても良いか?」

なるべく優しく声を掛けながら、紬の両肩を掴んでゆつくりと揺らして起こす。

最初はむにやむにや言つていた紬だったけど、少しずつ目が覚めてきたのか、寝ぼけた感じながら眼を開けて俺の方を見る。

「ハイリ……さん? むぎゆう……ハイリさあん」

まだ寝ぼけている様子の紬が、ふにやふにや身体を動かしながら物凄く甘えた声を出

してくる。格好といい、まさに猫なで声って感じだな……

「……はぷっ」

「!？」

「あら、まあ！」

小さな吸い付く音、驚愕する俺、にやけながら驚きの声を挙げる静久。

……あの、紬さん……寝ぼけてるからって、大胆すぎじゃあないですかね……？

「えへへ……ハイリさんですう……はぷっ……ちゅっ……」

「うん、俺だけ……あの、紬さん……そろそろ、ちゃんと目を覚ましてくれない……かな？」

「あー……えっと、私、外で待っていいようかしら？」

「いや、居てくれ！と言うか紬を起こすのを手伝ってくれよ！このままだと俺も歯止めがなくなりそうで」

「は、歯止めがなくなっちゃうんだ……」

「あ、いや……変な意味ではなくて、だな？」

我ながら、混乱しているとはいえよく解らないことを口走ったり、静久がおろおろしたりしていると、徐々に紬の目がぱっちり開いてくる。

「……ハイリさん？……シズク……？」

俺と静久の方を何度も交互に見て、そして自分の状態も見て、今の自分の状況を把握していった紬は……

「む、むぎゆううううううううう!?」

久々に、動揺した時に挙げる大音量のむぎゆうの叫び声を、俺達に聞かせてくれた。

「……むぎゆう……」

「あー……」

「えっ……と……」

少しして……冷静になった俺達は、灯台の床の上に三すくみのような位置で座っていた。

紬は真っ赤になって顔を伏せがちにながら、俺の方をちらちら見ている。

俺はその視線を受けて、紬同様に顔が赤くなって自然と俯きがちになってしまう。

静久はそんな俺達を交互に見ながら、少し苦笑いを浮かべている。

……なんだこの状況は。

「あ、ね、ねえ紬?あのストープは夏には無かったわよね?」

「むぎゆう?!……あ……は、はい。あれは、アオさんが冬は寒いだろうからって、駄菓子屋さんの倉庫にあって使わなかったやつをもらって、持ってきてくれたんです。」

前から思ってたけど、あの駄菓子屋何でも有るな。

そんな風に思いながら、話に出たストーブの方を見る。典型的な灯油ストーブで、中で炎が燃えているのが見える。

「そうなんだ。でも、部屋の中で使って換気は大丈夫なの？」

「はい。換気はしっかりするようにとアオさんにも言われましたので、灯台のベランダに繋がる入り口や、窓を少しだけ開けて、しっかり換気していますよ」

見れば確かに窓が少し開いているし、上の方を見れば、外に出るところも開いている。「なるほどね。……これじゃあ、絨が眠たくなっちゃうのも無理は無いわね」

そう、静久の言うように部屋の中はとつても暖かくて、とても眠気を誘う。

「はい、お二人が来るとの事だったので、部屋が寒いといけないと思い、暖めていたのですが……その、気持ちよくて、つい……」

「寝てしまった、と」

「はい、すみません……」

しょんぼりとうなだれる絨。それに合わせて、着ている猫のパジャマの耳も、ぺたんとして少し倒れているのが可愛らしい。

「いや、良いんだよ。むしろありがとうな、絨」

「そうよ、あんな可愛い絨が見れたんですもの」

「むぎゆっ!?わ、忘れてください!」

「そうだぞ、静久。あの紬を見て良いのは、二人きりになった時の俺だけなんだからな」
「むぎゆっ!?!ハイリさんまでなんて事を言うんですかあ!」

「あらあら、妬げちやうわねえ……ふふふ」

「ばたばたと慌てふためく紬、からかう俺に、それを見てにやにやとしている静久……
うん、これが俺達らしい姿だよな。」

「……あ、紬、これを」

「な、何でしょうか?」

いきなり声を掛けられてびくつとしながら、紬は俺が懐から取り出した物を受け取る。

「これは……レターセット、ですか?こっちの紙は……住所でしょうか?」

「うん。静久に聞いたたら、天善がここに手紙を届けてくれたって聞いてさ。手紙が届けられるなら……ぶ、文通とか、どうかなって」

「お、おお……これは、すごいです!これならハイリさんといつでもお話できますね!」

「そうねえ。普段からお話とか出来れば、さつきみたいな爆発しちやったりしないわよねえ?」

「わ、わすれてください!あれはイッショの不覚というやつです!」

わたわたと慌てふためきながら、紬はプレゼントしたレターセットと俺の家の住所をぎゅつと抱きしめる。さながら子供が大事なぬいぐるみを抱きしめるかのように。

「ありがとうございます、嬉しいです……でも……」

「ん？」

「どうしたの？」

何かを言いかけた紬に、俺と静久は首をかしげる。そんな俺達に向かって紬は顔を上げて……

「お二人がここに来てくれた事が、会えた事が……一番嬉しいですし、一番のプレゼントですよ」

そう言って満面の笑みを浮かべた。

『檻の蝶は迷い鳥と大空を舞う夢を見る』

「……貴女は誰ですか？」

「あ、私？ 私は久島嶋。あなたは？」

「……空門藍です。」

開いた窓を挟んで、訝しげに私をじっと見つめながら、目の前の女の子が言う。それに対して私は、何だかばつが悪くて、誤魔化すように笑いながら答えた。私達の出会いは、そんな感じだった。

*

コンコン。

「どどどど。」

返事を聞いてから、ドアノブを握ってゆっくりと回しながら、部屋の戸を開ける。開かれた部屋の中には、もう何度も見慣れた光景があった。

「こんにちは！アイアイ。」

「……その呼び方は、お猿さんみたいでどうも慣れないと前に言いましたけど。」

「えへへ……ごめんごめん。でも可愛くないかなあ？」

文句を言いながらも、アイアイが寝ているベッドの横にあつた椅子に、一瞬だけちらつと目線を移して、座るように促してくれる。

アイアイつて、ぶつきらぼうだけ優しいんだよね、うん。

「あんまり可愛いとは思いませんが、久島さんがどうしても呼びたいと言うのなら、まあ……」

「やっぱり、アイアイは優しいねえ。」

「……おだてても、何も出ませんよ？」

そう言つて、ぷいっと反対側の窓の方を向いてしまう。

「もしかして……照れてたり？」

「……」

これは……凶星かな？

怒つてる感じじゃあないとは思うんだけど……

「……で、今日はどんな話を聞かせてくれるんですか？」

少し沈黙が流れた後、アイアイが向き直つてくれた。

ちよつと笑つてる。うん、怒つてはなさそうだね。

「うん、今日はね……」

私は今日も、私が今までしてきた冒険の話を、アイアイに語りだした。

*

あの日……私は道に迷つて、彷徨つていた。

日差しが凄く暑くて、あんまり暑いものだから、日陰を探してた。

そんなこんなでうろろしてたら、ちよつと他の家とかよりは大きめな、診療所っぽい建物があつて、その壁際がちよつと良い日陰になつて、私はそこにもたれかかる様にして、休憩する事にした。

「うーん。さすがにスーツケースじゃ頭に乗つけて日傘代わりに……なんて、できないよねえ。困つたなあ。」

一緒に壁際に避難してきた、愛用のスーツケースを撫でながら、独り言が出てしまう。……スーツケースを開いて、中に骨組みを挿して、スーツケース型の日傘……なんてのも、結構面白いかもしれないけど！

あ、でもさすがに重過ぎるかな……うーん。

コツ……コツ……コツコツ……

そんな事を考えていると、近くから何かを叩くような物音が聞こえてきた。

周りを見渡すと、壁にあつた大きな窓が、音に合わせて小さく揺れているのが解つた。

音の元はあそこかな？

「何の音だろう……気になる！」

気になったら、確かめない訳にはいかないよね！

私は身体を起こして窓に近付いてみる。

「うわあ!？」

窓を覗き込んだ私は、思わず声を上げてしまった。

だってそこには、窓を挟んでもものすごく近い距離に、人の顔があつたから。

カラカラカラ……

見た目とは裏腹に、意外と軽い音を立てて、窓が開いた。

「こんにちは。」

そして、窓の反対側から、とても落ち着いた声と一緒に、女の子が顔を出した。

*

「……つて事があつたんだよ。」

「ふふつ……そうだったんですね。」

私が話し終わると、アイアイは少しだけ笑った。

あ、これは結構楽しんでくれてる時の反応だね。

あの暑い夏の日に出会ってから、お互いに自己紹介して、話をして……仲良くなって、今はこうしてアイアイの話し相手に来てる。

アイアイは、長い間寝たきりだったらしくて、今は良くなつたみたいだけど、まだ起き上がって外に出るとかまでは出来ないって事だった。

だから、私がする話の内容はとっても新鮮みたいで、いつも喜んで聞いてくれる。

こうして話を聞いて喜んでくれる人が居ると、私も冒険するのがより楽しくなってくる。

いつしか、こうしてアイアイに話をしにくるのが、私にとっても楽しい事になってきていた。

「ありがとうございます。今日の話も面白かったですよ。」

「うん！それなら良かったよ！」

そう言つて二人で笑い合う。

アイアイに面白いと言ってもらうのは、私にとっても嬉しい事だからね。

「……久島さん、少し聞いてもいいですか？」

「ん？うん、良いけど……何だろう？」

急にアイアイが、私の目をじっと見つめて真剣な表情になった。思わず私もちよつと緊張してしまう。

「冒険は、楽しいですか？」

「うん！とつても！」

「冒険は、誰でも出来るものですか？」

「うん！私でも出来るんだもん！」

「じゃあ……いつか私と一緒に……冒険、してくれますか？」

「うん！」

最後の質問をする時だけ、アイアイが少し目を逸らしたのが気になったけど、私は即答した。

アイアイはもう大事な友達だし、一緒に冒険できるなら、したいよね！

「ふふふつ……ありがとうございませす、久島さん」

「うん。あ、でも一緒に冒険するんだったら、それじゃダメだよ？」

「えっ？」

アイアイが少し驚いたような、鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をする。

「一緒に冒険するなら、久島さんじゃなくて、鳴って名前で呼んで欲しいな？」

「……そう、ですか……」

今度は何だか安心したような顔で笑顔を浮かべてる。

最初の頃に比べると、アイアイの表情のレパートリーが増えて、何だか嬉しいな。

「じゃあ、いつかよろしくお願いしますね…鳩。」

「うん……あ、でもなんで急に冒険したいって思ったの？」

「それは……ただ、唐突に冒険したいと思っただけです。」

何だかちよつと拗ねた感じで、また顔を背けてしまう。

あれ？アイアイどうしたんだろう？

「そうなんだ。」

「そう、ですよ？」

ちらつとこつちを向いて答えたアイアイの顔は、ちよつとだけ赤くなつてた。

*

その後も、他愛の無い話をしたりして二人で過ごしてたら、あつという間に外は夕暮

れ時になつてた。

「じゃあ、また来るね」

「はい……あ、くし……かも、め？」

「なに？」

椅子から立ち上がった私に、アイアイが呼びなれない感じで、声を掛けてきた。

「帰る前に、私の方へもう少し、寄ってもらえませんか？」

「うん、いいよ。」

「あ……出来たら少しかがんでもらえると良いですね。」

「ん？ことう？」

アイアイが寝ているベッドの横に立って、少し身を屈めると、突然目の前が淡いうす紫に染まった。

「え、あ……アイアイ？」

「……絶対、一緒に冒険しましょうね？」

声を掛けられてからようやく、アイアイが私に抱き着いてきていると言う事に気付いた。

なんでなのかわからないけど、少し震えてるみたいだった。身体も強張ってるみたい。

「あつ……」

「うん、一緒に冒険しようね……アイアイ。」

だから私も抱き返して、ゆっくり背中をさすってあげた。

なんだか怖がつてるようにも見えたから。

ちよつとの間、そうしてから離れると、アイアイがぼーつとした様な、熱に浮かされたような顔で私を見ていた。

「……鴉は、ずるいです」

「なんで!？」

しばらくしてからアイアイが呟いた言葉に、私は反射的に答えていた。

*

「……帰ってしまいました、ね。」

私の独り言が、寂しくなった部屋の中に響く。

久島嶋さん。最初に出会った時は、奇妙な闖入者だったはず。

でも友達になって、何度もお見舞いに来てくれて、話を聞いて、一緒に時間を過ごして……だんだんと。

勿論、蒼ちゃんには及びません。敵いません。

でも、蒼ちゃんへのはまた違ったドキドキが、鳴と話している時に感じられる様になって。

「……一緒にしたいのは、冒険だけじゃないんですよ？」

またしても出てきた独り言が、宙を舞う。

目覚めてからは、この部屋が私の世界の殆どとなってしまいました。

蒼ちゃんや、島の少年団の皆や……蒼ちゃんを奪ってしまった、でも蒼ちゃんや私を助けてくれた、につき鷹原さんや。

そういう皆とはまた違った存在。

冒険好きの女の子で、引っ張っていつてくれそう……引っ張って新しい世界へ連れ出して欲しいと、思った存在。

「想いは、上手く伝わらないものです……」

今度は独り言と一緒に、溜息まで出てしまいました。

こんな想いを抱いていると知られたら、気持ち悪がられたり、引かれて去ってしまうでしょうか？

様々な不安も有りながら、それでも鳴なら、笑って「うん、いいよ！」と言って手を引いて連れ出してくれる……そんな気がするのです。

だから私はこれからも、この世界に迷い込んできた、元気で明るくて可愛い迷い鳥さ

んが来てくれるのを、外の世界を眺めながら待っています。

羽依里の一番長い日

「おはようございます！羽依里さん！起きてください、羽依里さん！」

「……あ、うみちゃん。おはよう……」

俺は、もはや聞きなれた声に促されるように、目が覚めた。

「……って、まだ夜じゃないか？」

だけど寝ぼけ眼で周りを見ると、外はまだ暗いように見える。

「はい、今は午前四時です」

「やっぱり……と言うか、何でこんな時間に起こしに？」

「何を言ってるんですか！今日が夏休みの最終日なんですよ!」

言われて、部屋に掛かっているカレンダーを見る。

そうだった、今日が夏休みの最終日……つまり、この島で過ごす生活も最後の日、か。

明日は本土に戻って、家に戻って……また、あの日々が始まる、のか。

「……羽依里さん？ねえ、羽依里さん？」

「……ん、ああ、うみちゃんどうしたの？」

「もうっ、まだ寝ぼけてるんですか!」

「いや、この時間に叩き起こされれば普通の反応だとは思うけど……よっと」

明日からの日常……戻りたくない日常に想いを巡らして憂鬱になってた、なんて言えないよな。

俺は上手く答えてはぐらかして、それ以上何か言われる前に布団から起き上がる。

「……羽依里さん、今日は何か予定はありますか？」

「予定？うーん……これと言っては無いけど……」

「じゃ、じゃあですね。ふたつほどお願いがあるのですが……」

珍しく弱気そうな、というか少し照れたような感じで、うみちゃんがおずおずと言う。
どうしたんだろう？

「うん、良いよ」

「まだ何も言っていないんですがー!？」

「あ、いや……何となく」

「もうっ、そういういい加減なところは直さないとダメですよ？」

なんだろう、このお母さんに怒られているような感じ。

……いや、本物はここまで暖かい感じはしないけど……

「え、えつとですね……」

こほん、と一つ咳き込んで、改まってこちらに向き直って、うみちゃんがじつと……

とても真剣な眼差しで見つめながら言った。

「今日一日中、わたしと遊んでくれませんか？」

*

「いつてきまーす！」

「行つてきます、鏡子さん」

「はい、いつてらっしゃい。お夕飯までには帰つてくるのよ？」

俺とうみちちゃんは、鏡子さんに挨拶をして加藤家を出た。

時間は午前七時。あれから今日一日のうみちちゃんとの予定を組んで、ちようど起きてきた鏡子さんに伝えて了解をもらい、朝御飯を食べて今に至る。

「じゃあ、まずは駄菓子屋だな」

「はい！食料調達です！」

昼御飯の時間も外で遊びたいといううみちちゃんの要望に答える為、俺達はまず駄菓子屋に向かった。

鏡子さんが『お弁当でも用意しましょうか？』と言つてくれたが、それは俺もうみちちゃんも全力で丁重にお断りした。

「よつと……」

俺はバイクにまたがる。その後ろにうみちちゃんがしがみつくり形で乗る。

「ゆつくり行くけど、危なくなったら言うんだよ?」

「はい、羽依……お、おとうさん」

うみちちゃんのお願いの二つ目と言うのが、これだった。

『今日一日おとうさんと呼んで良いですか?』と。

『な、なんでおとうさん……?』

『え、えつとですね!あの……お恥ずかしい話ですけど、わたし、おとうさんとあまり仲が良くなって……』

『うん』

『……は、羽依里さんは、なんかおとうさんみたいな感じがして……』

『仲が良くないってこと?』

『ちがいます!羽依里さんの事は嫌いじゃありません!』

『え、あ……あり、がとう』

『もうつ!こんな事くらいで照れないでください!』

『い、いや、男子校だと女の子からそんな事言われる機会無くて、うん』

『は、話を戻しますよー……なので、夏休みの最後の思い出に、お、おとうさんと一日中一緒に、遊べたらなと……思い、まして』

『うん、良いよ』

『即答ですか!?!』

『ちゃんと考えてるよ。今年の夏はうみちゃんには本当にお世話になりっぱなしだったしね。お礼も兼ねて、それくらいは……それに、うみちゃんと遊ぶのは俺も楽しいから』

『……はい、わたしも楽しいです！それじゃあ、よろしくお願いしますね!』

今朝のやり取りをまとめると、こんな感じだった。

どうやらうみちゃんは、おとうさんとあんまり仲が良くないらしい。

でも、おとうさんと遊びたい……と言うか、構ってほしい、気にかけて欲しい、って感じかな？

そういう感じみたいだった。

それで、何となくおとうさんに近い感じの俺に、おとうさん代わりになつて欲しいと……そういう事だった。

……仲が良くないおとうさんに似ているつてのは、俺としてはちよつと複雑な気分

だったけど。

「……おとうさん、ひよつとして後悔してます?」

「ん?」

多分黙ったままだったからだろう。うみちゃんが後ろから心配そうに聞いてきた。

「いえ。もし気が乗らないのでしたら、今からでも朝のお願いは無しにしても」

「そんな事ないよ、朝も言ったろ?俺もうみちゃんと遊ぶのは楽しいからさ。今日一日、どうなるかなって色々考えてたんだ」

「そ、そうですか……よかったです」

心の底からとても嬉しそうな声を、背中で聞きながら、俺はバイクを走らせ続けた。

*

「いらつしやーい……あら、今日は二人一緒?」

「おお、蒼。今日は寝てないのか」

「おはようございます!」

駄菓子屋に着くと、既に店に居た看板娘の蒼が出迎えてくれた。

「いくらあたしでも朝っぱらからは寝ないわよ……なんて、ちよつと言いがたいけどね。」

実は少し眠い」

「毎日おつかれさまです、空門さん」

「あはは、まあ、これも看板娘の務めってやつかしらね」

そう言つてうみちやんに返ししながら、蒼がニヤニヤしながらこちらを見つめてくる。

「これくらい気遣いがすつと言えるようだと、嬉しいわよねえ」

「お疲れ様です、蒼」

「ふふふ、ありがと。でも、言われて気付くくらいじゃ、女の子にはモテないわよ〜?」
からかい気味に楽しそうに言ってくる蒼と俺の間に、うみちやんがすつと割り込んできた。

「そんなことありませんよ。おとうさんは本当はとっても優しくて色々気にしてくれる人なんですから」

「うみちちゃんのおとうさんってそんな感じの人なんだ……つて、おとうさん?」

「はい、羽依里さんです!」

あ、これは……

「え、羽依里がおとうさん……? うみちちゃんの、え、ええええええ! どういう事なのよ!」

「どうもごうも、羽依里さんはおとうさんなんです」

「え、ちよ……ちよつと待って理解が追いつかないわ、うみちゃんの年齢の子供が居るってことは羽依里は本当はもつと年上なの!？」

「いや、俺は高校生だつてば」

「高校生で子持ちとか、そうか、相手の子ね!? つて事は学生結婚でいわゆる若いツバメとのみだらであまい生活つてやつを」

「おーい、そろそろ戻つてこーい」

「空門さん、羽依里さんは本当のおとうさんじゃなくて、おとうさんの代わりになつてもらつてるんです」

「あ、うみちゃん、その説明は多分火に油を注ぐと思う」

「おとうさんの代わり……だ、だめよそんなことつ! うみちゃん、自分を大事にしないとダメよ! その歳で、え、え、援助とかなんとか……交際するならもつと清く正しい交際をしないと!」

……その後、誤解を解くまでに小一時間かかった。

*

「空門さん、今日もすごかったですね」

「あれはうみちゃんの説明も悪かった気が……」

「なんですか？」

「……いや、なんでもないよ」

背中越しにちよつとした圧力を感じて誤魔化す。

ちなみに、後ろからは圧力を感じるだけじゃなくて、がさがさと袋の擦れる音も聞こえてくる。

「でも、こんなにサービスしてもらつちやつて良かったんでしょうか？」

「蒼が良いって言うんだし良いんじゃないかな？」

あの後、今日は一日うみちゃんと遊んで、夏休み最後の思い出を作りに行くところだと何とか蒼に伝えると、時間を取らせたお詫びも含めて、沢山の菓子とかをくれた。

「空門さん、本当にいい人ですよね」

「ちよつと妄想が過ぎるけどな」

そんな話をしつつ、二人で笑いながらバイクを走らせる。

もう夏休みも終わりだというのに、まだまだ日差しも強くて暑い。

バイクで走ると風が気持ちよくてちょうど良かった。

「あ、羽依里だ！おーい！」

聞きなれた声を耳にしてバイクをゆっくりと止めると、通り過ぎた民家横の路地裏か

ら、ガラガラと音を立てながらスーツケースを引いて、鴉が姿を現した。

「久島さん、こんにちは！」

「うみちゃんこんにちは！」

「お疲れ様です、鴉」

「え、別に今日はそこまで疲れてないけど」

「もうっ、おとうさんだったら……それは空門さんのところでやったやりとりじゃないですか」

「おお、よく気付いたな」

「あたりまえです、さっきの事なんですから」

そう言いながらちよつと誇らしげに胸を張るうみちゃんと、俺を交互に見て、鴉がぼかんとした顔で言った。

「おとうさん？」

「なるほどねえ、それで羽依里がおとうさんかあ」

「はい、そうなんです。なので、今日はおとうさんがおとうさんなんです」

「うみちゃん、それは説明になってないと思う」

「あんですとー」

そんな俺達のやり取りを見て、鵬がくすくす笑う。

「なんだろうね、羽依里とうみちゃんが本当の親子みたいだねえ」

「そ、そう見えますか!」

急に身を乗り出して、鵬に詰め寄るうみちゃん。

「う、うん……うみちゃん、結構ぐいぐい来るねえ」

「そうだぞ、うみちゃんはこれでも結構ぐいぐい来る派だ」

「へえ、そうなんだね」

「ちよつと待つてください、なんですかそのぐいぐい来る派とか!」

「いや、だって朝なんてほぼ毎日叩き起こされてたし……」

「あ、あれは!おとうさんがなかなかちやんと自分で起きないからです!」

「ふふふ、二人とも仲がいいねえ。やつぱり本当の親子みたいだよ」

「そ、そうですか!」

俺に対してちよつと怒ったかと思ったら、鵬の言葉に目を輝かせて嬉しそうにするうみちゃん。

今日はまだ半日くらいしか経ってないけど、うみちゃんの表情がころころと変わって、色々なうみちゃんの表情が見れてとつても面白い。

「と言うか、羽依里が良いおとうさん役なのかもしれないねえ。よし、私も羽依里にお

とうさんになつてもらおうかな？」

「だ、だめですー！おとうさんはあたしのおとうさんなんです！」

そう言つて、必死にしがみついてくるうみちゃん。

こ、こんなに甘えたがりな子だったっけか？

「そつかあ……それは残念。私はおとうさん居ないからさ」

「あ……ご、ごめんなさい……」

少しだけ寂しそうに笑う鴎を見て、申し訳無さそうに謝るうみちゃん。

「ううん、良いんだよ。私の分まで、羽依里おとうさんとの楽しい思い出をいっぱいくつてね？」

そんなうみちゃんに、鴎は微笑みかけて言った。

「は……はい！」

少し戸惑い気味に、でも満面の笑みを浮かべながら、うみちゃんも答えた。

*

「お昼はあの灯台で食べましょう！」

バイクを走らせていくと、道の向こうに灯台が見えた。

うみちゃんは少し身を乗り出して、灯台の方を指差す。

「そうだね。もうちようどいい時間だしな」

「はい、行きましようおとうさん！」

灯台に着くと、そこには日向ぼっこをしている見知った姿があった。

「こんにちは！」

「あ、ハイリさんに……むぎゆ？どなたでしょうか」

「はじめまして、加藤うみです」

「はじめまして、紬・ヴェンダースです。よろしくおねがいます」

挨拶しあつて二人で同時に会釈をする。

なんだかタイミングがぴったりで面白い。

「俺が泊まつてる家の親戚の子なんだ。今日は一緒に遊んで回つてるんだよ」

「おお！それは楽しそうですね」

「はい、楽しいです！」

ニコニコとしているうみちゃんに、それを見て同じようにニコニコしている紬。

そんな二人を見ていると、俺も自然とにやけてしまう。

「ちよつと灯台のベンチを一つ貸してくれないか？お昼御飯にしようと思つてさ」

そう言つて、お菓子とかがいっぱい入った袋を見せる。

「大丈夫ですよ。でも、ベンチも良いですが、もし良かったら、せつかくでするので灯台の
中で食べませんか?」

「いいの?」

「はい、今日はシズクが来れないので、ちよつと暇をもてあましていましたので」

「でしたら、ヴェンダースさんも一緒に食べませんか? お菓子が多くておとうさんと二人
人だと食べきれないかもしれませんので」

「おお! それは嬉しいお誘いですね! ……むぎゆう? おとうさん、ですか?」

喜んだ後に少しして、違和感に気付いていつもの口癖と共に首をひねる紬。

朝から言われ続けてるから、俺自身はもうあんまり違和感無いけど、やつぱりそうなる
よなあ。

「はい、羽依里さんは今日はおとうさんなんです!」

「今日だけ、ですか?」

「えつと……はい、今日だけです」

「ですか……でも、ハイリさんは優しい方なので、ずっとおとうさんだと良いですね」

「! ……はい!」

最初は嬉しそうに、でもそのうちちよつと悲しそうに、うみちゃんと言う。

それに対して細かくすぐぐったい事を言ってくれると、満面の笑みでうみちゃんが答える……なんだろう、これ。

「あの、二人とも……嬉しいんだけど、なんかこのやり取り、変に褒められてるみたいで俺がすごく照れくさい」

「みたいじゃなくて、ほめてるんですよ！」

「はい、ハイリさんはとても良い人です」

「あの、なんか……その、やめて……」

恥ずかしそうにする俺を見て、二人はずっと笑っていた。

*

周りは、もう暗くなってきた。

俺がバイクを運転する間、ずっと後ろで抱きついていたうみちゃんも、さすがに疲れたのかうとうとしたので、俺はバイクを降りてうみちゃんをバイクに載せて、手押しで進みながら家路についていた。

「……おとーさん……」

「うん？うみちゃん？」

「……ごめんなさい……ありがとう……」

不意にうみちゃんの方を見ると、バイクの前のほうに寄りかかって眠っていた。

「寝言か……」

色々な出会いがあつた夏。

蒼や、鷗や、紬と……良一や天善やのみきと一緒に、よく遊んだ夏だった。

そういえば、この島に来た最初の頃に、プールでの衝撃的な出来事もあつたっけ。

すっかり忘れていたけど……何故今、思い出したんだろう？

「……この夏が、永遠に続けばいいのにな」

星が綺麗に見える夜空を見上げながら、ぽつりと呟く。

「……はい……」

眠っているうみちゃんが、返事をする。

寝言だろうと解つてはいるけれど、妙に言葉やタイミングがかみ合っていて、うみちゃんもそう思える夏を過ごせたのならなど、そうあつてくれれば嬉しいなど、ふつとそう思った。

羽依里の一番長い日　く少女の一番長い夏く　「終」

はじめてのおつかい

私は今、船に揺られて本土を目指している。

学校に行く時にも乗っているはずなのに、目的が目的だけに、何となく落ち着かなくなってしまう。

「羽依里……」

ふっと名前が口から出てくる。

自分で口にしたのに、羽依里の名前を耳にただけで、なんだか恥ずかしくなってしまう。

「どうしてるのかなあ……」

船があげる波飛沫を眺めながら、また自然と言葉が出てくる。

事の発端は、数日前にさかのぼる。

「……そっか」

手にした羽依里からの手紙を読んで、溜息をつく。

いつもなら羽依里からの手紙を読んだと、胸がどきどきしたり、思わず手紙を抱きしめちやうくくらい嬉しいときもあるんだけど、今回は違った。

「来れないんだ、羽依里」

手紙には、数日後の私の誕生日を祝いに来る予定だったのが、都合が悪くなつて来れなくなつてしまった事が書いてあつた。

いつも羽依里の手紙には、書いてある内容に、笑わされたり、嬉しくさせられたりする事はあつたけど、落ち込んでしまった事は初めてだった。

私、そこまで羽依里と会いたかつたのかなあ？

……いい、いや、期待してないし！羽依里なんて居なくても、居なくても……

「……さみしい、かな、やつぱり」

あの夏に、羽依里と恋人になつてから、もうだいぶ経つた。

長い休みや連休に入るたびに、羽依里は遊びに来てくれた。

それ以外でも、特別な日にはほとんど必ずと言っていいほど、会いに来てくれた。

「……………」

そこまで考えて、気付いてしまった。

羽依里が会いに来てくれる事はあるけど、私から会いに行つた事つて無い様な……うん、無かつた。

「……行っちゃおうかな……」

想いが言葉に出てしまう。

羽依里に会いたい。

「どこにだ？しろは」

「お、おじいちゃんっ!?部屋に入るときは声を掛けてっついても言ってるのに!」

「いや、何度も声をかけたぞ?上の空で聞こえていなかったようだが……」

「あ、そ、そうなんだ……ご、ごめんなさい」

全然聞こえてなかった……

おどろくのと同時に、そこまで羽依里の事を考えていたのに気付いて、ちよつと恥ずかしくなる。

「……あの小僧のところか?」

「ちっ、違うし!羽依里関係ないし!」

「その手紙、小僧からの手紙だろう?」

「そ、それは……そう、だけど……」

凶星を突かれて、思わず目を逸らしてしまった。

「ならば、行ってくるが良い」

「……え?」

「会いたいのだろう、あの小僧と」

「そ、それは……うん」

もう誤魔化せなくて、私は頷く。

「会いたい時に、会いに行けるのなら……行って来い」

そう言うおじいちゃんの表情が、一瞬だけ、とても寂しそうに見えた。

「……うん」

そうだよ、私から会いに行っただって良いよね。

誕生日だし……私自身への誕生日プレゼントと思えば、うん。

*

「……えつと……」

そして今、私は見知らぬ街の中で立ち尽くしていた。

迷った！完全に迷った！

ど、どうしよう……

「……あら、貴女は確か……羽依里の知り合い？」

「え!?は、はい!？」

急に声を掛けられて振り向くと、そこには髪の高い、とても綺麗な女の子がいた。

思わず返事しちゃったけど……だ、だれ!?

「もしかして、羽依里の家を探してるとか?」

「あ、うん、そう……」

「なら、案内してあげるよ、こっちこっち!」

そう言つてその女の子は私の手を引っ張る。

え、ええ……!?

「はい、ここが羽依里の家だよ」

「はあ、はあ……ど、どうも」

この人、足はやい!

早歩きでも、ついていくのがやつとだった。

おかげで息があがってしまった。

……それはそれとして、どうしても聞かないといけないことがある。

「ど、ところで、あなたは、羽依里と……ど、どういう関係?」

「んー……あ、それは本人に聞いたらいんじゃないかな?」

そう言つてその子は、にやりと笑つて羽依里の家の方を向いた。

私もつられて振り向くと、そこには……

「しろは……なんで!？」

鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をした羽依里が立ってた。

「……………」

私は羽依里の家の近くの公園で、一人でベンチに座っていた。

あの後、あの女の子は「じゃあ後はよろしくね」と羽依里に告げて、すぐに去ってしまった。

羽依里は羽依里で、家ではちよつとあれだからと、この公園まで案内されて、ここで待っているように言つて、家の中に戻つてしまった。

「なんなんだろう……」

一気に色々な事があつて、私の頭は良くない想像がぐるぐる回っていた。

なんで羽依里に会えたのに、こんなところで一人で座ってるんだろう？

羽依里、家にはあげたくないのかな……というか、あの女の子、誰？

「おまたせ」

羽依里の家知つてたよね……つてことは、家に行つたりする間柄つて事？

「……………しろはっ!？」

あの子、可愛かつたな……なんか向こうは私の事知つてたみたいだけど、会つた覚え

が無い。

「おーい、しろは？」

……もしかして、前に羽依里に送った写真で見たとか……でも、それくらい親しい仲って事？

親しい仲……羽依里と親しい仲の女の子……？

「……しろはー？」

「……ん」

「おわあ!？」

なんか私の名前を呼ぶ声が聞こえたので、振り向くと、そこにはちよつと引いてるよ
うな羽依里の顔があった。

「どうしたの？羽依里」

「い、いや……しろは、なんかめちゃくちゃ怖い顔してたから」

「……どうせ私は可愛くないし」

なんだか自分でもわからないくらいに不機嫌になってる、なんでだろ？

「いや、可愛いよ」

「可愛くないし！さっきの子の方が綺麗だし！」

自分で自分の言った事に、はっとする。

あ、あれ……なんでさっきの子の話が出てくるっ!?

「しろは……もしかして、さっきのあいつの事なんか勘違いしてる?」

「あいつって誰、あいつじやわからない」

羽依里に会えて、嬉しいはずなのに、とげとげした言葉がたくさん出てくる……うう、なんか、やだ。

「……え、しろは覚えてないのか? プールで一回会ってるはずんだけどな」

「……え?」

プール……って、島の学校のプールだよな?

「ああ、さっきのやつは俺の同級生だよ」

「同級生……え? もしかしてあの子……ううん、あの人って……」

羽依里の学校って確か……

「うん、男だよ。俺の学校が男子校なのは、しろはも知ってるだろ?」

「え……えええええっ!?!」

私の絶叫が、公園中に響き渡った。

「そうかそうか、しろははヤキモチ妬いてたんだな」

「や、妬いてないし!」

「じゃあ、なんで自分と恵を比べるような事を言ったんだ？」

「そ、それは……私より綺麗な人だなと思って……」

「……俺がとられちゃうとか思った？」

「うん……じゃ、じゃない！そんな事思っていない！何を言わせる!？」

私の勘違いに気付いてから、羽依里はずっとにやけっぱなしで意地悪な事を言うてる。

うう……うううううう！勘違いしてたのは私だけど、だけど！

「いや、だつてさっきのしろは、あんまり怖い顔してたから……」

「もうっ！どすこいつ！」

「そ、それは言い過ぎなんじゃないかな!？」

「羽依里も意地悪言いすぎっ!」

「ご、ごめん……」

どすこいは言い過ぎかもしれないけど、羽依里も意地悪言い過ぎだもん……恥ずかしいよお。

「もう……で、でも……確かにどすこいは言い過ぎた、かも……私も、ごめん」

「……ははっ」

「……ふふっ」

お互いに謝って顔を見合わせると、思わず笑みがこぼれてしまった。

「……そういえば、しろははどうしてここに？」

「あ、うん……その……誕生日、プレゼント」

「え？」

羽依里がぴんと来ないって顔してる。

そ、そうだよ、その説明だけじゃわからないよね。

「羽依里に……会いたかったから。羽依里に会うって言う、私から、私への……誕生日プレゼント」

言い終わってから、自分が言った事のあまりの恥ずかしさに顔が真っ赤になってしまふのが自分でもわかる。

良いのっ、事実だもん……事実だもん！

「そっか……ありがとう、しろは。俺も嬉しい」

そう言っつて羽依里は、本当に、すごく嬉しそうに笑った。

その笑顔を見ているだけで、ここまで来た苦労が全て報われた気がする。

……私って、こんなに単純だったかなあ……

「じゃあ、俺からも誕生日プレゼント……」

そう言っつて羽依里は懐から小さな箱を取り出して、私に手渡した。

「また島にいけるとときに、直接渡そうと思ってたんだ。開けてみてくれないか？」

羽依里に言われるままに、手にした箱をそつと開ける。

「……………、これって……………」

「本当は今日、島に行つて向こうで渡すつもりだったんだけどさ。親があんまり遠出し過ぎだつて……………反対されて、どうしても行けなくなっちゃつてさ」

それで、あんまり家にあげたくなかつたのかな？

残っていた疑問も、話していくうちにだんだん無くなっていつて、嬉しさしか残らなくなつていく。

「羽依里、これ……………つけてみていい？」

「あ、うん……………バイトでためたお金で買ったものだから安物だけど……………」

震える手で箱に入っていた物を手に取り、つけてみる。

ぴつたりだ……………羽依里の事だから、会いに来た時に調べてたのかな？ちよつと恥ずかしいけど……………

「すごく嬉しい。ありがとう、羽依里」

「……………誕生日おめでとう、しろは」

満面の笑みでお祝いしてくれる羽依里。

きつと私も、ものすごい笑顔になつてると思う。

そんな二人の間で、私の手にはめられた指輪が、光を反射して眩しく輝いていた。

～藍色の初恋～（お試し版）

『病室に来て、話をしてくれた事は、大体全部、憶えています』

『大事な人の話す話ですから、忘れようがありません』

『そして話を聞く中で感じた、言いようの無い感情』

『それが何だったのか、当時は解りませんでした』

『もどかしいような、悲しいような、嬉しいような……』

『しばらくしてその正体に気付いた時、わたしは悩みました。

悩みぬいた末、ある行動を起こすことにしたのです』

蒼ちゃんが本当の意味で目を覚ましてから、一週間ほど経ちました。

まだ身体の自由がきかない蒼ちゃんは、わたしと同じこの病室でベッドを並べて横になっっています。

「う、ううん……」

どうやら蒼ちゃんが目を覚ましたようです、寝起きの声も可愛いです。

「おはようございます、蒼ちゃん」

「ん……おはよう、藍」

わたしが挨拶をすると、蒼ちゃんも笑顔で答えてくれます、可愛い。

「蒼ちゃん。起き抜けで申し訳ありませんが、一つお願いがあります」

「ん？何、藍？」

わたしは、隣で寝ている蒼ちゃんに話しかけました。

蒼ちゃんはきよんとした顔でこちらを見えています、とっても可愛いです。

「羽依里さんを一日貸してください、デートします」

「ああ、いいわよその位……って、はあああああつ!?」

「勘違いしないでください、デートと言ってもテストのようなものですから」

「て、テスト!?!」

目をぱちくりさせている蒼ちゃんも可愛くてずっと眺めていたのですが、それでは話が進まないのです、ここは心を鬼にして話し続けます。

「はい。こうしてわたしが目を覚まし、蒼ちゃんも目を覚ましましたので、そろそろ決着をつけたいなと思ひまして」

「決着……って、いったい何の？」

「どちらの方が蒼ちゃんを好きか、です」

「う、うええええ!?!」

ああ、予想外の話に驚いて目を丸くしている蒼ちゃんも素敵です。

「え、えつとお……なんか色々突っ込みどころはあるけど、それでなんでデートにつながるわけ？」

「はい……羽依里さんには、わたしを蒼ちゃんに見立てて、恋人とのデートの時にどんなことをするかを上演してもらおうかなと。それでわたしが満足させられれば、羽依里さんの勝ち。満足できなければ私の勝ちという事で」

「あのー……それって、あたしが直に羽依里とデートするんじゃないやダメなわけ？」

「ダメです、羽依里さんは良い人ですがヘタレで奥手ですから。変なデートコースやプランを組んで蒼ちゃんを幻滅させるなんて許せませんから」

「た、確かに羽依里はそういうの得意そうじゃないけど……でも……」

「それに、将来義理とはいえ弟になるかもしれない人ですから、今のうちからよく知っておきたいんです」

「へ、義理のつて……や、やだ藍、それはちよつと気が早いわよ!」

頬に手を添えて真っ赤になる蒼ちゃん……至高です。

そうなるまでに惚れているのが羽依里さんなのが、複雑ですが。

「……認めたくはありませんが、蒼ちゃんはそこまでのつもりで羽依里さんと付き合っていると思っていましたか？」

「そ、それは……そう、だけどお……」

もじもじしながら認める蒼ちゃんを見てみると、とても可愛いのですが複雑な感情が芽生えます。

「それにですね、蒼ちゃんに聞かせたくない話も、あるので」

「な、なに……なんかそこまで言われると滅茶苦茶気になるんですけど」

もう一息というところでしようか、これは。

「……ダメですか？」

「ぐうっ……そ、そんな顔して頼まれたら……ことわれないっ、じゃない……わかったわ、良いわよ！一日だけよ!」

困ったような泣きそうな顔でじつと蒼ちゃんを見つめながら頼むと、蒼ちゃんが折れてくれました。

蒼ちゃんは可愛いだけじゃなくとても優しいです、まるで女神です。

「ありがとうございます、蒼ちゃん」

「どうせなら、しつかり楽しんできなさいよ？羽依里にも念押しして言っとくから」

「……はい」

そう言つて屈託なく笑う蒼ちゃんを見て、少しだけ、心の奥がちくりと痛みました。

続きは、
R o u t e
A Iを手に取りお楽しみください。

伝説の始まり（お試し版）

フェリーが港に着岸する。

俺は荷物を詰めた鞆を持って、他の乗客と一緒にフェリーから港に降り立った。

「一年ぶりか……」

自然とそう呟いていた。

この島に来たのは、去年が初めてで、それも夏休みの間だけ。

だと言うのに俺は、まるで何年も、何度も夏を過ごした故郷に戻ってきたような、そんな懐かしさを覚えていた。

「は、羽依里——！」

俺の名前を呼ぶ声のする方へ視線を向けると、そこには去年恋人になったしろはが、こつちに駆け寄ってくる姿があった。

一年ぶりの再会とは言え、ここまで喜んだ様子で迎えてくれると、とても嬉しくなる。
「おお、しろは……ん？」

笑顔で手を振って答える俺は、違和感に気付く。

こつちに向かつて走ってくるしろはの表情は、喜んでいるというよりは必死の形相と
言うか……

「た、助けて！羽依里！」

「え、え？」

俺のところまでたどり着いたかと思うと、そのままさつと俺の背中に隠れてしまう。

……恋人同士が会った時の、その……ハグとかつて、こんな感じだったっけ？

「しろは！頼む！少しだけでも考えてみてくれ！」

疑問に思っている俺の思考を遮るように、また聞きなれた別の声が入ってくる。

その声の方へ視線を向けると、これまた見慣れた人物が、しろはと同じように必死の
形相で此方に向かつて走ってきた。

「し、しつこいし！嫌だつて言ってるし！」

俺の背中に隠れて、めいっばい嫌がつてる恋人と、そんなしろはに物凄い勢いで迫っ
てくる友人。

……そりや、どつちを優先するかは明白だよな？

「何が何だかわかんないけど、とりあえず……落ち着けええ！天善——」

俺は思わず力が入った叫びをあげながら、手にした鞆をしろはに向かつて突っ込んで
くる友人……天善に勢いよく投げつけた。

「他校とのダブルス親善試合？」

「ああ、そうだ」

港での一騒動から少しして。

鞆が見事にヒットし盛大に吹っ飛んでから、多少は落ち着いて天善を連行して、俺としろはは駄菓子屋に来ていた。

あのまま港で話を聞いても良かったが……あんだだけ騒々しかったんで、さすがに人の目が痛い。

落ち着いて話が出来る場所とは考えて、結局駄菓子屋の奥の座敷を借りて、そこで話を聞く事にしたんだ。

「学年毎に対抗でやるんだが、今年は受験だなんだで俺一人しか三年の部員が残ってなくてな。顧問に相談したら、特別に卓球部に所属している者以外でも、了解を得られれば出場可能と言う事になったんだ」

「そうか。って、それなら良一とかに頼めば……」

「試合形式が男女混合なんだ」

「……なるほど。なら、蒼とかのみきとかは？」

「あー……それがね？」

蒼の声は駄菓子屋の店舗の方から聞こえてきた。

続きは、SS集3を手に取りお楽しみください。

VEREINIGEN 秘めた願望達 (お試し版)

「むぎやむぎやむぎやむぎや……」

「ううううううう……」

ここは灯台の中。部屋の本真中には俺、鷹原羽依里。

その俺の右腕に紬、左腕に静久……が、それぞれしがみついている。

そして紬と静久がお互いににらみ合い唸り合い、真ん中の俺は、暑さが厳しい夏だと言うのに冷や汗がたらたら。

えつと……何がどうしてこうなった!?

事の発端は、些細な事だった。

他愛もない話を三人でしていたら、紬と静久、どちらがより俺の事を好きなのかという話になり……何故かここまでの事に。

……お、俺はどうしたらいいんだ?

むぎゆうううう……こんなつもりではありませんでした。

わたしはハイリさんに抱き着きながら、ちよつと後悔しています。

視線の先には、シズクが居ます。

とつても大好きな友人で、今、ちよつとだけケンカしてしまっている友人。

ケンカの理由は簡単です。

どちらがハイリさんを好きかという、他愛の無い話が始まってから、ちよつと熱が入ってしまい……その……張り合ってしまった。

もちろん、シズクがハイリさんを大好きなのは、知っています。

この三人が会った一昨年の夏から……それに去年の夏に、シズクの思い出のカレー作りを手伝ってからは、もうシズクの中のハイリさんへの好意はうなぎ上りです。

……シズクがうなぎになったら、やっぱりおっぱいも大きいのでしょうか？

いえ……今はそんなことを考えている場合じゃありません。

一昨年の夏に、わたしとハイリさんは恋人になりました。

ですが、シズクがハイリさんを、友達としても、それ以上としても好きな事は、わたしには解っていました。

そして、去年の夏に色々あつて、その気持ちはますます強くなつたようでした。

だから、シズクはハイリさんの恋人になりました。

それは、わたしがシズクとハイリさんをお願いしたことです。

シズクがハイリさんを好きになるほどに、シズクが苦しそうに見えていききました。そのハイリさんを好きな気持ちは、同じく……いえ、それ以上にハイリさんを大好きなわたしには解ります。

でも、三人で居たいから、既にハイリさんと恋人になっているわたしが居るから、この関係を壊したくないと……多分、シズクはそう想っていたんだと思います。

だから、わたしは二人にお願いしました。

ハイリさんには、シズクとも恋人になつてくださいと。

シズクには、どうせなら恋人なのも一緒に良いです、と。

最初は二人とも驚いていましたし、受け入れてはくれませんでした。

でも、わたしには、そんな事で三人の関係がギクシャクしてしまつて、今まで通りに笑ひ合えないのが嫌だったので。

別の誰かだったなら、わたしも絶対に認めなかつたと思います。

もう、ものすごい顔で歯ぎしりが止まらなくて、歯が削れて無くなるまで、一日中その相手を威嚇し続けてしまったと思います。

……でも、シズクは特別です。シズクなら、許せるどころか、ずっと三人一緒に居られるなら、その事が嬉しい位です。

続きは、SS集3を手に取りお楽しみください。

彼と彼女の望むもの

「こんにちは、今日もいらしたんですね」

「はい」

見慣れた顔の、彼女の担当看護師さんの挨拶に、俺は微笑んで答える。

「今日も元気ですよ」

「……みたいです」

看護師さんに言われて、俺は彼女の顔を覗き込む。

その表情はとても穏やかで、時々笑っているような風な変化を見せる。

そんないつもの様子に安堵しつつ、これもまたいつもの様に、漠然とした不安にも襲われる。

「……大丈夫ですよ！検査結果は以前よりとっても良くなっていますし、そのうち目を覚ましますよ！」

「そうですね……そうですね！」

変に気を使わせてしまったようで、少し困ったような微笑を浮かべながら、無理して

明るく振る舞っているのが物凄く伝わってくるテンションで、看護師さんが俺を励ましてくれる。

俺は、看護師さんにまで心配させてしまっているなど、内心苦笑しながら、同じように敢えて明るく答えて笑う。

「お優しいですね、いつも助かります……ありがとうございます」

常日頃、彼女の事を熱心に世話してくれている看護師さんに、俺は感謝の意味も込めて、笑顔のままお礼を述べる。

「え、あつ……ありがとうございませいゆ！」

一瞬呆けた様な顔をしていた看護師さんが、急に慌てたように顔を赤くして答える。余程テンパっていたのか、少し語尾を囁んでるのが、看護師さんの幼気な容姿と相まってとても可愛らしい。

「そ、それじゃ何かあつたら呼んでくださいいね！」

まだ少し赤みを帯びた頬を緩めながら、嬉しそうにそう言つて看護師さんは部屋を出ていった。

「さて……おやあ？」

彼女の方を向き直ると、先程とは違った表情……まるで拗ねた子供の様な表情で、すーすーと寝息を立てていた。

「ふふふ、もしかして妬いてるのか？ 嗚……」

そう言つて彼女……嗚の頬に手をやってゆつくりさすると、だんだん頬が緩んでいき、終いにはとつてもだらしない表情で『えへへ……』とか寝言を言い出す。

「……妬くくらいなら、早く起きて一緒に居ような、ずつと」

自分でも解るくらい、寂しげな俺の独り言が、医療機器の発する音だけが響いている部屋の空気に混ざつて消えた。

*

「羽依里ー！ ほらー、早く早く！」

「慌てるなつて、宝物は逃げないんだからさ」

「でも、私達以外にも宝を探して冒険してる人が居るかもしれないよ？」

「そんな……いや、無いとは言えないけどさ」

「でしよでしよ！ だから急がないと！」

今日も私は羽依里と一緒に冒険してる。

今は伝説の海賊が残したお宝を求めて、宝の地図を片手に、私達の船で出港したところだった。

「そういえばさ、今度の宝物は何なんだ？」

「えーっと、それはね……」

すぐにいつものやり取り……『教えてあげないよ、じゃん♪』と言おうと思つたけど、ふっと急に冷静になつて思つた。

……あれ？私、何の宝を目指してたんだっけ？

「……教えてあげないよ、じゃん♪」

「おーい、何を手に入れに行くか解らないと探しようがないぞー」

困つた顔で、でも楽しそうに言う私の相棒にして、恋人の羽依里。

いつも冒険に付き合わせちゃつて悪いなつて思うけど、羽依里が居ない冒険なんて、今じゃ考えられないくらい、私にとって大事な存在。

「でも、一緒に冒険してくれるんでしょ？」

「……当たり前だろ？そんなの」

ウインクして唇の前に人差し指を添えて、自分でも少しあざといかなあつて思う仕草をしながら、羽依里の顔を覗き込む様にして言うと、羽依里は少し照れたような表情でそう答えた。

「えへへ……ありがと、羽依里！」

そんな羽依里に私は思わずにやけて返事をする。やっぱりずっとずっと、羽依里と一

緒に冒険していたいなあ。

『なら、そろそろ目覚めないとだね』

うん、そうだね……つて、あれ？何か聞こえたような……気のせいかな？

それに何だか懐かしいような……

*

病室の窓から見える景色の中では、早咲きの桜がちらほらと見える。

ここで季節の移り変わりを窓から眺めるのも何度目だろうと、自分で自分に問い掛けながら、俺は窓の外と鴉の顔を交互に見る。

外で咲いている桜に負けないくらい、血色良くふわふわとしたほっぺた。

手入れをしてなくても整っているまつげは、鴉のわりと大きめな眼と合わせて、とても可愛らしい。

そして何より長く伸びた、綺麗な艶のある濡羽色の髪……鴉なのに鴉の羽色みたいだよなあつて、何度も思っては一人で笑ってる。

「なあ、鴉……今お前は、どんな夢を見てるんだ？」

眠っている鴉の表情は、少なくとも俺が見ている時はいつも楽しげで、ころころと変

わる。

看護師さん達に聞いた感じだと、俺が居ない時は殆ど無表情らしい。

安易に喜んで良い状況じゃないけど、それは何だか俺が鷗の中で凄く特別な存在なんだなと実感できる事で、どうしても嬉しくなってしまう。

「……桜、綺麗だぜ……いつか一緒に見に行こうな」

その少しほっそりとした手を握りながら、窓の外の景色を目に映し、俺は鷗にそつと語りかけた。

*

「ううー……羽依里とはぐれちゃったよお」

罨にかかって羽依里と離れ離れになってしまった私のつぶやいた声が、洞窟の中に反響する。

地図を信じるならお宝まではあと一步のところまで来てるけど、羽依里の事が心配だし、何より凄く心細い。

「……あれ？……扉がある」

とぼとぼと歩いている私の前に、急に頑丈そうな金属の扉が現れた。

金属製だし、洞窟の中だから、多分誰かが作ったやつだよな。

「なんか書いてる……えーつと？」

洞窟の中には光る苔かなにかが生えてるらしくて明かりには困らなかつたから、扉に書かれたそれを読むのは簡単だった。

【この扉へ真に望むものを叫んだ時、宝物への道は開かれん】

「望むもの？」

読んだ後に、私は首をひねって考え込む。

望むものって…海賊の財宝、とかかな？

「海賊の財宝——」

しーん……何も反応しない。

違うのかあ、それじゃあ……

「じゃ、じゃあ……絵本に出てくるような冒険！」

こういう抽象的なやつってことなのかな？

でも、それでも扉は何にも反応を示さない。

「どうしたらいいんだろう……ね、羽依」

羽依里と言いかけて、そういえばはぐれてたんだったなあと思いつく。

……ずっと羽依里が一緒の生活だったから、いつもの様に普通に声をかけようとし

ちゃったよ。

「……」

途端に物凄く不安感と寂しさが襲ってくる。

「……羽依里い……」

自分でもとつても情けないと思うくらい弱々しい声が、私の口から漏れ出てきた。

*

「こんにちは……あら、今日はお祝い事か何かあったんですか？」

「え？あぁ……いえ、実は俺の誕生日なんです。せっかくだし今日は鷗にも祝ってほしいなと思って」

「そ、うですか……誕生日だったんですね、おめでとうございますー！」

そう言つてわりと上等なケーキの入った箱を手に笑う俺を見て、担当看護師さんが一瞬だけ悲しげな表情をした後、すぐに満面の笑みを浮かべてお祝いの言葉をくれる。

もう鷗のところに見舞いに来るようになって何年だろう。この看護師さんも、最初に会つた頃は新人さんだったのが、もうすっかりベテランの域に入るみたいだ。

……つまり、それだけ長い間、鷗はまだ眠ったままつてことなんだけど、な。

「あ、お引き止めして悪かったですね……きつと久島さんも喜んで祝つてくれますよ！病室へ行ってあげてください！」

「はい、ありがとうございます」

半分は励ますように、半分はそうあつてほしいと願うように、看護師さんは明るく言つて病室に向かう俺を見送る。

(……鷗、お前の分もあるんだからな?)

病室に向かう俺の、手にした箱の持ち手を握る手に、少し力が入る。

去年までは仕事とかでどうしても来れなかったから、これが初めての、鷗と一緒に過ごす誕生日。

例え鷗がこのまま目覚めなくても、これから毎年、ずっと、こうして二人で祝つていけたらなと、俺は思った。

*

「はあ、はあ……もうっ……どうしたらいいんだろう?」

私は扉の前で立ち尽くしていた。

あれから思いつく限りの言葉を扉にかけ続けたけど、うんともすんとも反応しない。

……こんな時、羽依里が居てくれたらなあ。

「……やっぱり、羽依里が居ないと楽しくないよ……羽依里い……」

『そうだね、一人は寂しいね』

「!?……だ、誰!？」

急に聞こえた、あの懐かしい声に周りを見渡すけど、誰の姿もない。

『鳴が望むものって、一人で手に入れて嬉しいものかい?』

「……え?」

なんで私の名前を知ってるんだろう、とか、そんな疑問も頭に過ぎったけど、それよりもその問い掛けが私の心に突き刺さった。

……冒険も、宝探しも、スーツケース片手にあっちこちあるき回るのだから……羽依里が居ないと、多分寂しい。

ううん、とつても寂しい!

「……そっか、望むものって、形のあるものだけじゃないよね」

不思議と、今度は確実に扉が開くって自信があった。

でもちよつと勇気がある……と言うより、口にするにはとても恥ずかしい事だから、一度深呼吸をしてから、私はしっかりと大きな声で言った。

「私が望むものは、羽依里と一緒にする冒険、羽依里と一緒にする宝探し、羽依里と……」

羽依里と一緒に……羽依里と一緒に居る事！」

言い終わった後、一瞬の静寂が流れて……

(ぎぎぎ)っ！

凄い音を立てて、扉がゆっくりと開いた。

「やったあ……うわあっ!?!」

喜んだ私の背中を、誰かがそつと押すような感触がした。

そのまま押された勢いで、開いた扉の中に飛び込んでしまう。

体勢を直した後ですぐ振り向いたけど、そこには誰の姿も無かった。

代わりにまた、あの懐かしい声がどこからか聞こえる。

『鴟、お前はまだ来ちゃダメだよ。あと……お母さんよろしくね』

その言葉で私は確信した。

「待って、おとうさ……」

私が言おうとした言葉は、急に視界いっぱいに広がった眩い光に飲まれて、掻き消されてしまった。

*

「……」

俺は夢でも見ているんだろうか？

「……おはよう、羽依里……ううん、ただいま、かな？」

弱々しい声で、でもこれ以上無いくらい明るく元気な笑顔を見せて、昨日までは俺がどんなに見つめていても見返すことはなく眠っていた鴎が、目を開き俺を見て声をかけてくる。

「……っ……」

「……やだなあ……泣かないでよ、羽依里……」

無茶言うな、何年待ったと思ってるんだよ。

それに、言ってるお前も泣いてるぞ……鴎？

「……かも、め……おかえり……」

俺は涙でぐしゃぐしゃになった顔を腕で乱暴に拭い、まだ泣きそうになりながらも笑顔浮かべて鴎に言う。

鴎は、寝たきりだったせいで身体が動かないんだろう……涙で濡れた顔をそのまま拭わず、でも同じように笑顔を浮かべて、とても嬉しそうに答えた。

「ただいま……羽依里……」

そう言って二人で笑い合い、しばらく見つめ合う。

医者や看護師に言わないとなんだらうけど、今だけは、まだもう少しだけ、こうして
いたい……そう思いつつ俺は、ずっと待ち望んだ、愛する人の「ただいま」を聞けたと
いう、最高の誕生日プレゼントを噛み締めていた。

家族 団欒

「おかあさん、これなに？」

「ああ、これはね……紫陽花って言うの」

「あじさい？」

「うん、そう。綺麗でしょ？」

「うん！」

「これはね、お父さんが私にプレゼントしてくれた花なんだよ」

「そうなんだ！でもあじさい、ほんにはさまれてくるしそうだよ」

「ふふふ、大丈夫。これは押し花って言って、お花を葉にしたものなんだよ？」

「へー、そうなんだ。すごいね！」

「うん、そうだね」

「ねえ、おとうさんはなんでおかあさんにあじさいをぶれぜんとしたの？」

「え？……ふふつ……それはね？」

*

俺は、しろはに内緒で鳥白島にやってきていた。

今日はしろはの誕生日、それを直接お祝いする為に。

そしてそれと同時に、しろはに結婚を申し込む為に。

「でも、どうしよう……」

接岸したフェリーから降りながら、俺は空いた両腕を組んで悩んでいた。

「……花……とか、やっぱり要るよな」

結婚を申し込む際に一緒にプレゼントしたいと、本土の方で船に乗る前に花屋を巡ったのだけど、何故か行く先々の花屋でそれらしい花が売り切れていた。

誕生日のお祝いもあるので、出来れば綺麗な花の一つでも持っていきたいのだけど。

「……やっぱりあいつに相談してみるか」

考える前から、そうするしかないとは思っていたけれど、もう一度考えてみてもやっぱり良案が思いつかなかったのだから、俺は一縷の望みをかけてある場所へ向かった。

しばらくして、俺は駄菓子屋の店先に居た。

「なるほどね。……って言うかあんた、そういうのは前もって用意しておきなさいよ？」

「いや、枯れたりしおらせちゃったらダメかなって思ってた……花の手入れなんて解らな
らっかい」

俺の事をジト目で見つめる蒼の視線が痛い。

「まあ、羽依里が花の取り扱い方とか詳しくかったら、確かに気味悪いわね」

「そ、そこまで言うか!?!」

「ふふふ。冗談よ、冗談」

そう言つて一頻り笑つた後、蒼が急に真顔になる。

「でも、この島には花屋なんて無いし、この駄菓子屋でもそういうなま物はさすがに常時
取り扱つてはないわね」

「そうか……まあ、そりやそうだよな」

「そもそも、誕生日やプロポーズに花を送ろうなんて考える男の方が、この島では珍しい
わ」

「え、でもそんな事は無いんじゃない」

「……良一や天善だったら、送ると思う?」

俺は、蒼に問われてしばし考えて、

「……釣り用具とか卓球のラケットとかだろっうな」

「でしょ? さつすがシテイボーイよねえ」

俺の答えにしたり顔で頷く蒼。ただ、シテイボーイとかはあんまり関係ない気がする。あいつらが特殊なだけだろう。

「となると……後は、自分で用意するしかないわね」

「自分で、つて……この島にこの時期咲いてる、プレゼントに適した花なんてあつたつけ？」

何度かこの島には来ているけど、そんな話は聞いた事が無い。

「ああ。そんな大層なものじゃないけど、うつつけのはあるわよ？ 鳴瀬神社の境内の端に色取り取りの紫陽花が咲いてる所があるのよ。それなんか良いと思うわ」

「紫陽花……確かに綺麗で良さそうだな」

「でしょ？ あれなら花束とかも作りやすいし……ほら、花束用の紙ならあるから持つていきなさい」

「……相変わらず、品揃えが変に豊富だよな、ここ」

「まあ、この島の駄菓子屋だからね」

花束用と渡された紙を受け取ってそう言うのと、何処か誇らしげな感じで両手を小さく広げ肩をすくめて蒼が言う。

「そうだな……ありがとう、蒼！」

「ええ、上手くいく事を祈ってるわよ……つて、焦って走ると転ぶわよ！ 気を付けなさい

よー！」

しろはへのプレゼントの目処がついた事で、居ても立っても居られなくなった俺は、蒼の言葉を途中まで聞いた辺りで走り出してた。

*

「はあ……はあ……」

全力で走って鳴瀬神社の境内に着いた俺は、息を整えながら早歩き程度の速度で、蒼に教わった紫陽花の咲いている一角へ急ぐ。

少し奥の方へ入った辺りで、視界の端の方に、色鮮やかに紫陽花が咲き誇っているのが目に入った。

「こ、ここか……よし、えっと……どの色が良いだろう？」

赤、青、紫……緑や白色のなんてのもある。

「……やっぱり白、かな？」

俺は白い紫陽花の傍まで行ってそれを取る。

……別に『しろは』に送るから白を選んだって訳じゃない。さすがにそんな駄洒落た意味じゃなくて。

「うん……やっぱり綺麗だな」

白の紫陽花を紙で包んでまとめた手製の花束を見て、俺は自然と微笑む。

純白の花束って感じでプロポーズには丁度良いし、何よりしろはみたいに純粋で綺麗な感じで……うん、良いな。

「よし……行く、か」

自然と表情が引き締まる。

あの夏以来、毎度この島に来る度に、小鳩さんにも認められてるみたいで、最初の頃のような刺々しさもない。

しろはとの関係も年々良好になってきて、あとは俺が勇気を出すだけ……だ。

「……たかはらああ！はいりい！」

いつかもやったような気がする、自分に気合を入れる為にあげた俺の叫び声が、静まり返った神社の境内に響き渡った。

*

「はい……え、羽依里？……なんで此処に居る!? 今年は来れないんじゃないの!？」
鳴瀬家の玄関戸を開けて顔を出したしろはの表情が、驚きに染まる。

「えっと……誕生日を直接祝いたくて、来たんだよ」

「そ、そう……そうなんだ……えへへ……ありがと、羽依里」

俺の説明を聞いたしろはの表情が、徐々に驚きから喜びに変わる……やっぱ可愛いな、しろはは。

「誕生日おめでどう……それと……しろは」

「う、うん、なに？」

急に真面目な表情をした俺につられてか、しろはも神妙な顔付きになる。

そんなしろはの目の前に、俺は後ろ手に持って隠していた白い紫陽花の花束を出して、此処に来るまでに何度も心の中で練習した言葉を口にする。

「……お、俺と、一緒になってくれないか、しろひゃ」

……囁んだ、最後に盛大に囁んだ。

沈黙が流れ、黙って見つめ合う俺としろは。

そのまま数秒ほど見つめ合った後、俺達は二人同時に吹き出していた。

「は、羽依里……緊張しすぎ……ふふふ」

「そ、そりや緊張するだろ……ははは」

笑いつつ、少し涙を浮かべながら、その笑顔のまま俺の方をまっすぐ向いて見つめて、しろはが言った。

「……うん……いいよ」

そう言つて、俺の差し出した花束を受け取るしろはの頬を、一筋の涙がこぼれ落ちていった。

*

「……つて言う事があつたの」

「うわあー、ろまんちっくだあ」

「うん、私みたいに綺麗だったからつて、お父さん言つてくれたんだよ。それが嬉しくてね？あと、お父さんは知らなかつたのかもしれないけど、白い紫陽花だつたのがとつても嬉しかったんだよ」

「しろいのだと、なにかちがうの？」

「花言葉、つて言うのがお花にはあつてね？白い紫陽花はね……『ひたむきな愛情』」

「おおー！おかあさんとおとうさん、らぶらぶですー！」

「ふふふ、ありがとう。……でもね、紫陽花の花自体に、他に、とつても素敵な花言葉があつてね」

「えー、なにになに？」

「それはね……」

くおしまいく

鴟が飛んだ日

季節は秋。通い慣れたこの場所の廊下の窓からは、中庭に植えられた木々が織りなす綺麗な紅葉の風景が見える。

そんな廊下を通り、俺はとも見慣れたある部屋のドアの前に立っていた。

「鴟、入るぞ?」

コンコンとノックをし、「どうぞー」という中からの返事を受けて、手を掛けたドアノブを回しゆつくりと扉を開くと、そこには俺の大切に大好きな恋人が寝ていた。

「今日は調子はどうだ?」

「うん、絶好調!……とまではいかないけど、そこそこ良いよ?」

「そっか、それなら良かった」

努めて明るく、けれども雪のように白いその腕を足へ伸ばし、痛むだろう箇所をさすりながら鴟が笑う。

そんな鴟の様子を眺めながら、俺は内心では複雑な表情を浮かべながら、実際にはそれをおくびにも出さずに答える。

……もう、随分と見慣れた光景とやり取りだ。

鴉はあの夏、確かに眠りについた。

けれども、それから数年して……不意に眠りから覚めたんだ。

このまま一生、鴉が目覚めないかと不安になったこともあったけれど、それ以上に、それでも鴉と添い遂げると決めていた俺は、そんな彼女の唐突な目覚めに狂喜乱舞した。

でも、それは喜ばしい事だけではなくて、むしろ鴉にとっては苦難の日々の始まりだった。

「今日はね、これ！」

俺に向かって、人差指と中指を立てた右手を向けてくる。

それを見て俺は我が事のように嬉しくなって答える。

「すごいなー！二歩も歩けたのか！」

「うん！……って言っても、両脇を看護婦さんに抱えて支えてもらってだけだね」

そう行つて笑い合う俺達。

そう……何年も眠っていた、そして元々諸事情あつて運動等を実際にはしていなかった鴉は、目覚めたは良いものの、体力も、身体の機能も、著しく衰えていたのだ。

目覚めた最初の頃なんて、ベッドの上で身体を起き上がらせて少し上半身を動かすだけで、息を切らせていたんだ。

『鴉!?だ、だいじょうぶか?』

『うん……だ、い、じょうぶ……えへへ……リハビリが必要だねえ』

あの時、そう言つて笑つた鴉の顔を未だに忘れられない。

いや、一生忘れる事はないだろう。

あんな、満面の笑みを浮かべているはずなのに、まるで今にも泣きそうな印象を受ける笑顔は。

「あ、羽依里!あれ買つてきてくれた?あれ!」

「ああ、これだろ?ちゃんとおあるよ」

俺は手にしていた買い物袋の中から、とあるお菓子の袋を取り出す。

鴉の好物である。パリンキーだ。

「ありがと、羽依里。いやー、ほとんどこの部屋で過ごすからこれくらいしか楽しみがね」

「だよなあ。……俺が出来ることは何でもするから言つてくれな?」

「……うん……ありがと、羽依里」

そう言う俺はどんな表情をしていただろうか?

明るく軽く言つたつもりではあつた、けど自分で発した言葉を聴いても、その声は堅い。

多分、表情も……どうしても、鷗の今置かれている状況、身体のことを考えると、明るく見せるばかりでは居られなくなってしまう。

だから、そんな俺の反応を見て、鷗も少し複雑な表情をしてしまう……させてしまう。

「……なあ、鷗？」

「ん？なに？」

「……あ、あーんしてやろう、か？」

「へっ!？」

だから俺は、強引にでもそんな流れは断ち切ろうとする。

……いや、鷗に食べさせるのは初めてじゃないし、俺自身もそれで食べる鷗が可愛くて見たいから、流れを変えるだけではないんだけどな。

でも、やっぱり恥ずかしい……俺も、鷗も。

「え、えへへ……じゃあ……お願いします」

「お、おお」

少し頬を赤くしてはにかむ鷗に返事をする俺も、きつと似たような反応をしてるのだろう。

なんだかそれがおかしくて、また鷗も同じ様に感じたのか、俺達は視線が合うと、同時に照れくさそうに笑いあった。

*

冬のある朝。

鴟の病室前に辿り着くと同時に、室内からガシャンと言う音が聞こえた。

「鴟!?!」

慌てて、ノックもせずにはドアを開け室内に飛び込む。

するとそこには……

「……は、羽依里……?」

床に女の子座りで座り込む鴟の姿があった。

「ど、どうしたんだ鴟……あつ!」

鴟の姿に驚いて、その横の光景に気付くのが一瞬遅れ、それを視界に入れた途端、血の気が引くような感覚がした。

「鴟、動くな? 絶対動くなよ?」

「……うん」

動揺している俺とは対象的な声色の、やけに落ち着いた鴟の返事。

それに違和感を感じながらも、俺は鴟の横に散らばったガラス片を片付ける。

「コップでも取り落したのか？」

「……うん」

片付けながら推測して鷗に声をかけると、それを肯定するようにしつかりと頷く。

その鷗の表情は何故か暗い。それが気になりはしたものの、鷗をこのまま床に座り込ませている訳にもいかないので、割れたガラスを片付けた後、俺は鷗の傍に寄り、鷗をベッド上へ抱き上げようとする。

「鷗、えつと……ちよつと抱きかかえるからな？」

「う、うん」

別にやましい事は何も無い、けどどうしても恥ずかしくなり顔が熱くなる。

それは鷗も同じ様で、俺の方から視線を外して頬を赤くしている。

「……」

「……」

鷗をベッド上に引き上げた後、何とも言えない雰囲気俺達の間流れる。

不可抗力とは言え、引き上げる為に鷗を抱きしめる様な形になってしまったし、その……つまり、アレの……むごつほの感覚がダイレクトに……

「羽依里」

「え、あ、はい!？」

そんな事を考えていると急に名前を呼ばれて、動揺しながら返事をする。

そして鴉に目を向けた俺は……そこで違和感に気づく。

鴉も恥ずかしくがっていると思っていた俺の予想は外れ、鴉はとても不安げな悲しい表情で俯いていた。

「……鴉、どうした?」

「あの子、羽依里……私、きつとこれから羽依里にたくさん迷惑かけちゃうよ。全然自分一人じゃ、歩く事も出来ないし……今だって、羽依里に怪我させちゃうかもしれないよ。たし」

「もしかして、床に座り込んでたのって……」

「うん、もうそろそろ行けるかなあつて思つて、一人で立つてみようとして……失敗しちゃった」

最後の方は、笑顔を浮かべながら明るく言い、その後「えへへ」と苦笑いを浮かべる鴉。

その笑顔は、俺の胸を強く強く締め付ける。

「……ねえ、羽依里。もし私が普通の女の子みたいになれなかつたらさ、その時はさ……」

「それ以上は駄目だ、鴉」

「……………え？」

ああ、俺は馬鹿だな……………鷗の、最愛の恋人のこんな不安も察してやれないで。いくら鷗が元々明るい元気なやつだからって、大丈夫な訳ないよな。

本当に俺は、大馬鹿だ。

「それ以上は言ったら駄目だ。俺は……………鷗が良いんだ」

「羽依里……………」

「ほとんど毎日、鷗に会いに来てるのは、俺が鷗と一緒に居たいからなんだぜ？他の誰にもそんな気持ちにはならない」

「……………うん」

「それにさ、俺は鷗が目覚めてくれただけでも十分だよ。こうして話が出るし、一緒に時間を過ごさせるんだ」

「でも、迷惑かけちゃう……………」

そう言つて更に顔をうつむかせる鷗。

俺は、そんな鷗の暗い雰囲気吹き飛ばすかのように、出来る限りの笑顔を浮かべて続ける。

「ははは、そんなあの夏の時から今更だろ？あんな雲を掴むような宝探しに付き合わされたりしてさ」

「ひ、ひどーい！ た、確かにあれば、今考えると、すこしだけ、無茶だった気もするけどさ」

「でも俺は鴎と一緒に居るって決めたんだ。あの時も、今も……無茶でも何でもさ、お前と一緒にいてくれるならそれで良い」

「！」

懐かしい話で少し気が緩んだのか、顔を上げて弱々しく抗議の声を上げる鴎の両頬に手を添え、鴎の目を見てしっかりと、俺の気持ちを改めて伝える。

「迷惑なんて幾らでもかけろよ。俺は鴎の恋人なんだからさ」

「羽依里……」

「例え、もし、一生歩けなくても……俺はずっと鴎の傍に居るぞ」

「うん……うんっ……！！」

鴎が泣きながら笑顔を浮かべ、肩に顔を乗せるようにして、俺に抱きついてきた。俺も優しく鴎を抱きしめ返す。

俺の肩に落ちた鴎の涙は、何故だかとても暖かく感じた。

*

春……外を見ると、遠くに桜並木が見える。

今日俺は病室ではない場所に来ていた。

「……お疲れ様、鷗」

「うん、ありがと羽依里！」

手すりにつかまりながらも2mの距離を歩ききった鷗が、俺の声に明るく答える。

今俺達が居るのは、病院のリハビリ室。

あの冬の日の後、鷗は担当の先生へ、本格的な歩行の訓練をさせてもらえる様に懇願し、このリハビリ室へ通い始めた。

最初の頃は、二〜三步歩けば座り込んでしまう様な有様だった。

けれども鷗は諦めなかった。まるでそうしないと死んでしまうかのように、毎日リハビリに没頭した。

俺も見舞いに来ている時はそれに付き合ひ、手伝ってもう数ヶ月。

今では、手すりを伝つてとはいえ、これだけの距離を歩く事が出来ていた。

「それにしても、毎日頑張るよな……すべーいやる気だよ」

「……羽依里のおかげなんだよ？」

「へ？」

「『あの時』さ……歩けなくても一生傍に居てくれるって言ってくれたでしょ？」

「う、うん」

今考えると我ながらなんて恥ずかしい事を。

いや、100%本心なんで別に後悔はしてないけど。

「だから、羽依里がどうなっても一生居てくれるなら、歩けないのは勿体無くなって」

「……勿体無い？」

「うん。だって、羽依里と一緒に色んな事したいし、色んな場所に行きたいから」

「……」

やっぱり鴬は強い女の子だなと、改めて思わされる。

あの夏、必ず来る別れを知り覚悟していながら、笑っていた鴬。

その懐かしい笑顔と同じ笑顔が、今俺の目の前にはあった。

「だから、私が毎日頑張ってるのは羽依里のおかげ。私が羽依里と一緒に居たいだけな

んだよー？」

そう言って、横に座っている俺の鼻の頭を人差し指でツンと小突いてくる。

楽しそうな鴬の様子とその言葉に、俺はひどく動揺してしまう。そしてそれと同時に

に、鴬が頑張っている理由にとっても納得がいつてしまった。

……だって、今、鴬が言った言葉は……

『ほとんど毎日、鴬に会いに来てるのは、俺が鴬と一緒に居たいからなんだぜ？』

あの冬の日には俺が鷗に言った言葉と、ほとんど同じような意味合いだったから。

「……鷗、ありがとうな」

「うん！」

そんな鷗の気持ちに、笑顔でお礼を言う俺に、鷗もとても素敵な笑顔を返してくれた。

*

季節は初夏に差し掛かる頃。

俺と鷗は病院の中庭に居た。

「本当に大丈夫か？」

「うん！大丈夫！」

少し離れたところで、車椅子に乗った鷗が元氣いっぱい返事をする。

対して俺は、どうしても不安が拭えない。

「じゃあ、いくよー！」

「お、おお」

俺が返事をするのとほぼ同時に、鷗が車椅子から立ち上がる。

その立ち上がりはしっかりとっていて、去年の今頃とは雲泥の差だった。

(でも、問題はここからだ)

春の間、鷗が必死に頑張つてりハビリをしてきたのは、傍で見えて知っている。手放しても、数歩くらいなら、ゆっくりとなら歩ける事も知っている。

それでも……やっぱり心配にはなってしまう。

「あと……少し……」

そんな俺の心配を他所に、鷗の足は止まらない。

むしろ一歩ずつ進む毎に、不安定だった足取りは徐々にしつかりとしていく。

「鷗……あと数歩だ！」

「うん……あつ」

俺の声に笑顔で答えた瞬間、鷗が急にうずくまる。

「鷗!？」

慌てて俺は鷗のいる場所へと駆け寄る。

あと一歩踏み込めば鷗の目の前、というところで、鷗はすくつと立ち上がった。

「鷗？」

「羽依里！」

そして鷗は……俺に向かって踏み出すと同時に、飛んだ。

転んだのではなく、飛んだ。

「うわあっ!?!」

突然の事に動転しつつも、俺は鷓を倒れさせまいと必死に手を伸ばし身体を寄せて抱きとめる。

期せずして俺の胸に飛び込むような形になった鷓の様子に、俺の心配は頂点に達する。

「鷓?!大丈夫か?!」

「……羽依里……」

「ど、どうした?どこか具合が悪い……!」

俺の腕の中に収まっている鷓の様子を覗き込みながら、心配になって少し早口になっていた俺の言葉は、突然の妨害に合い遮られる。

「……えっ……鷓……?」

「えへへ、ドツキリ大成功!」

唇に感じた柔らかい感触と、いつの間にか首に回された鷓の両腕の感覚に、一瞬呆けていた俺を、唐突な悪戯を仕掛けた張本人が、ニヤニヤと笑みを浮かべながら見つめている。

「お、おまつ……まさかさっきのつて」

「うん……ちよつと驚かせたくて、えへへ」

「おまええ……冗談がすぎるぞ?」

「ごめんごめん……でもね?」

すまなそうに謝る鴎が、次の瞬間には再びいたずらっ子の様な笑みを浮かべる。

「不意を突いて、勢い付けないと……あ、あんな事、したくても恥ずかしくて出来なくてね?」

そう言つて、首に回していた腕を片方外し、片手で自分の唇をなぞり顔を真赤にする鴎。

そんな可愛い事を可愛い表情で言われたら、もう何も言えなくなってしまう。

「……羽依里?」

「あ、ああ?」

「……ありがと、大好きだよ」

そう言つて、まだ動揺が収まらない俺の唇に再び、愛しい恋人の唇が重ねられた。

家族と祝う日

「ハッピーバースデートゥーユーー！」

「ありがとう……皆」

二月二日……今日は私が生まれた日。

今日も私は、皆にこの日を祝われている。

でも、いつからか周りに居る人達は変わっていった。

子供の頃は、昔からお世話になっていた鳥白島の大人達や、少年団の皆。

そして鷹原と出会ってからは、鷹原も加わり……月日は流れ。

「おめでとう、美希」

「今年も祝えて本当に嬉しいわ」

「うん、ありがとう」

失礼だが、こうして改めて見ると、少しばかり老けただろうか……とても嬉しそうに、目の前の老年の男女が私を見て言う。

彼・彼女との関係は……色々と複雑な物があるが、こうして毎年わざわざ島に来て祝ってくれる様になって、物凄く幸せだ。

照れくさいので、面と向かってそんな気持ちも伝えた事は無いが、いつか素直に伝えなければなと思ってている。

想いは、ちゃんと伝えないと、ちゃんと伝わらないから。

「……美希、おめでどう」

「うん……」

駄目だ、やっぱりこいつだけは別格だ。

どうしたって、にやけてしまう。

今この場に居る皆、皆大好きだ。

けれどその中でも、一番……ううん、世界中の人間の中で一番。

そんな事は、口にしたら、この子達に拗ねられてしまいそうだから、皆の前では言わないけれど。

……まあ、そうでなくても……そ、そんなにやこと言うのは……は、はずかしい……

「あー、お母さん照れてる!」

「らぶらぶだー!らぶらぶだー!」

「なっ!おまえらー!」

「あははー!」

私が怒る素振りを見せると、余計にキヤツキヤとはしやく子供達。

全く誰に似たんだか……絶対こいつだな。

そんな風に思い、ふっと、隣に座る彼の顔を見る。

ちようど彼も私の顔を覗き込んでいた様で、至近距離で目と目が合う。

冷やかされた直後だからか、何とも言えない恥ずかしさが胸の奥から込み上げてくる。

……まるで、キ、キスする直前みたいだなとか思っただけからな、ないからな!?

「にゃ、にゃんだ!?!……!」

動揺を隠しきれずに、思わず声をかけた私の視界が、彼の顔でいっぱいになる。

何時間もそのまま時間が止まったかの様な、そんな錯覚を覚える程、長く長く感じるその瞬間。

ゆっくりと離れる彼の顔は赤く染まっていた。きっと私の顔も赤く……どころか真っ赤だろう。

……人間余りの事が急に起こると、かえって冷静になるというのは本当らしい。

だって、いきなり一番愛しい人からキスをされたと言うのに、私は今こんなに考える事が出来ているのだから。

「美希、愛してるよ」

「んにゃあ!?!」

まだ顔が赤いまま、こいつはこんな事を言った。

まてはやまるないまはみんなのめのまえだぞ！ふたりもこどもたちもみているというのにおまえは！おまえはあ！

「うにやああ！うにやああ！はいりい！はいりい！」

「美希!」

こいつのこの言葉を聞いた時点で私は限界だったのだろう。

後々周りに居た皆に聞けば、私はこいつの胸元に自分から飛び込んで、頭をぐりぐりと押し付けながらずっとうにやあーとかこいつの名前を叫び続けてたらしい。

ちなみに後日の私には、その辺全く記憶がない……色々限界ですつ飛んでしまったのだろう。

でも、そんな私を優しく抱きしめてくれた感触は、朧気ながら覚えている気がする……そんなはつきりしない感覚を思い返すだけでも、無意識に身体がもじもじとしてしまう。

……あと、後で私が何をしてしまったか尋ねられて真っ赤になつて黙るくらいならこんな事をするなお前は！

「……………美希」

「にや、にやんだ!？」

しばらく私が御乱心してしまったらしい、その後、抱き着きから離れた私に向けて、急に真顔になったこいつが……キ、キスする前の様に、私をじつと見つめて声をかけてくる。

まだ動揺取まらない私とは対照的に、こいつの表情と声色は真剣だ。

「俺、お前を幸せに出来てるか？」

少しばかり不安そうに、そんな事を言ってくる。

……昔と変わらず、馬鹿だな、お前は……

「うんー」

幸せで無い訳が無い。

こうして家族に囲まれて、一番大事な人も隣に居て、そうしてくれたのがお前で……

「私はとても幸せだ、羽依里」

だから、あの日からずっと嬉しいプレゼントを私にくれ続けている、最愛の人へ。

そして、大切な家族の皆へ、私は満面の笑みを浮かべて、そう答えた。

『Summer Pockets』発売五周年記念
シヨート・ストーリー

「ここからの景色は相変わらず綺麗だな」

「そうですね。変わらずきれいです」

「そうだな。五年経ったけど変わらないよな」

「はい。これからもずっとと変わらずいっしょですよ」

「だな……灯台の女神様が言うんだから間違いない」

「ふふふ……はい」

「♪」

灯台屋上のテラスに出て、一緒に夕焼けに染まる海を眺めながら、嬉しそうに鼻歌をうたう紬。

あれから五年……様々な事があって、今も変わらず俺達はここでこうして一緒に暮らしている。

五年前。

あのあまりにも眩しくて、夢中で駆け抜けた夏。

その夏の眩しさが起こした奇跡。

それを日々噛みしめながら、紬と俺は今もこうしてこの灯台で一緒に暮らしている。

「……ハイリさん、ききたいことがあります」

とびつきの笑顔を俺に向けながら、やけに神妙な雰囲気を出し始める紬。

「ん？どうしたんだ紬、改まって……」

「わたしといっしょになって、後悔はしていませんか？」

不安を滲ませたと言う表現がぴつたりとくるような、そんな声色で紬が問いかけてくる。

紬は普通の可愛い女の子だ。

だけど、他の人達とはちよつと違う女の子だ。

まだ五年しか経っていないけれど、まず見た目は全く変わっていない。紬という存在を考えたら、ひよつとすると十年、十五年、二十年……ずっと、ずっとこの見た目かもしれない。元々が、本当は、普通の生きているものじゃないから。

『だいじょうぶです！その時はこんじょーで見た目も変えます！』

以前、紬が今後歳を取らないかもしれない可能性の話が出た時、そう言つて明るく元気に笑つて答えた……様に見せていた紬。

けれども、ずっと紬の中で不安と、迷いがあつたんだろう。でも、俺の答えは決まっている。

いや……ずっとずっと前から、それはもう決まっていた。

「後悔なんてしてないし、これからも後悔なんてしない。俺は何があつても紬と最期まで居ると……『あの夏』に決めたんだ」

「ハイリさん……」

紬と過ごした夏……その翌年の夏。

引き寄せられるように、灯台の前に集まった俺と静久。

紬の事を懐かしんでいると、何故か灯台の中から紬の歌う声が聴こえた気がして。

灯台のドアを開こうとしたら、内側から開いて紬が「おかえりなさい」と出迎えてくれて。

静久と二人でとてもびっくりして、次の瞬間俺達は泣き出してしまつて。

そうしたら紬も泣き出しちゃつて、三人で抱き合いながらわんわん泣いて……

そう、あの時から……あの、紬ともう一度会えた夏から、俺は……

「それに、さつき『これからもずっとずっと変わらずいっしょ』って言ったのは、紬じゃなかったか？」

「……はい……はいっ！そでしたね！」

瞳を涙でにじませて、にっこりと、今度こそ屈託の無い笑顔を浮かべる紬。そんな笑顔を浮かべた紬の頬を、一筋の雫が流れ落ちる。

夕日に照らされてキラキラと輝くそれは、紬の笑顔を、も更に輝かせて。

その光景は、まるで本当に目の前に女神様が居る様な、そんな錯覚を覚えさせる物だった。

時間は更に下がって夜更け。

紬は夕方泣いたりしたせいか、疲れている様子だったので先に休ませて、俺は俺で仕事に取り掛かる。

「さて、新作も頑張って作っていかないとな。紬とずっとここで一緒に生きていく為に」

そう、あれから五年経っているから、俺ももう22歳でとつくに成人して社会に出ている。

……と言っても、俺が選んだ道はちよつと特殊だったりする。

紬と再会できたあの日から将来の事を色々と考え、紬と島の皆が良ければ、此処で

……この灯台で暮らしていけないか。

そう思った俺が選んだ道は……

「……ハイリさん？まだ起きてるんですか？」

「え、紬!?!……あ、起こしちゃったかな。ごめん」

「いえいえ。そんな事より……無理してよふかしし過ぎないでくださいね？」

「あ、ああ……うん、大丈夫だよ。ありがとう」

昔の事を思い出している間にだろうか。いつの間にか俺の横に座り、見るからに心配そうな表情で気遣ってくれる、ネコの着ぐるみパジャマ姿の紬。

俺はそんな紬に答えながらその頬を優しく撫でる。すると紬は一瞬で顔を微妙に紅潮させた後、「にゃー」と鳴いて頬を撫でる俺の手を受け入れ、むしろ自分から俺の手に頬を擦り付けたりもしてくる。

「こうしてみると、灯台の女神様って言うよりお猫様だよなあ」

「むぎゆ!?!かくさげされました!?!」

「いや、可愛さはかなり増してる感じだぞ？」

「ならいいです」

良いのか、紬よ。

そんな突っ込みが口から出そうになるも、「♪」と心底嬉しそうに鼻歌をうたいなが

ら、頬に俺の手を添えたままの紬を見てみると、自然と俺も嬉しさがこみあげてくる。

「……あ、ハイリさんの邪魔になっちゃいますね。すみません」

「いや、ちやうど休憩しようと思つてた所だから大丈夫だよ」

「そうですか、それならよかったです……ところで、今度はどんな作品をつくっているんですか?」

もはや逃がさないという感じで、頬に当てた俺の手の上から、更にネコパジャマの肉球グローブ部分を当てて俺の手の感触を満喫している紬。

そんな紬の視線が、俺が向かっている机の上に置いてある、書きかけの新作へ移る。

「処女作の灯台の女神様に続く作品だよ」

「おおー、それはとても期待できそうです!」

「内容聴く前から期待すると、期待外れになるかもしれないぞ?」

「だいじょぶです!」

茶化したように答えた俺の言葉に食い気味に答えながら、空いたもう片手を俺に向けて肉球を見せつける紬。

きつと紬的には、いつもの人差し指を立てて腕をびしつと伸ばす、あのちよつとした決めポーズ的な仕草をしてるつもりなんだろうけど、パジャマと肉球効果でもう可愛さしかない。

「ハイリさんなら何があつてもだいじょうぶだと信じてますから、いつも」
「あつ……あ、ありがとう……」

にここにこと満面の笑みで、真正面から見つめて言われると、言われる側はとても照れる。と言うか照れた。

俺が、紬と一緒に居られる為に、選んだ道……それは作家。

灯台に住んで、なるべく灯台で過ごしながら出来る仕事。それを模索して出した結論がこれだった。

最初はもちろん大変だったし、島の皆の協力もあつて、いろんな仕事の手伝いをしながら、生活を助けてもらっていた。

その後、紬の事をモチーフに書いた『灯台の女神様』が、ありがたい事かなりのヒットをして、今はそれ一本で何とかやっていける状況だ。

作品のレビューでは『時々入るポエミーな表現がクセが強いけど癖になる』とか、変な賛辞？も多いけど、おおむね好評だからそこはまあ良いかな。

「おやあ？あたらしい作品のタイトル……これは……もしかして……」
「あー……うん、まあそういう事、かな？」

発表までは紬には内緒にしておきたいなと思っていた部分が、目に留まってしまったようだ。

そう、『灯台の女神様』が紬の事をモチーフに書いた作品で、その続きにもなるこの作品は、今度は俺の事をモチーフにした……

『灯台守の物語』……灯台と、灯台の女神様を守り、添い遂げる男の話だよ」

終